青鞜

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十月一日發行 第一巻第二號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十月一日
第一巻第二號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第二號内容

太鼓の音（小說）……一……小金井喜美子
人ごみの中を行きつゝ（詩）……七……與謝野晶子
一諾（劇詩）……二一……大村か代子
ふそ言（小說）……二七……岡田八千代
ある夜（小說）……三三……尾島菊子
稲の花さく頃（短歌）……五〇……祐子
お高（小說）……五三……岩野清子

花芙蓉（俳句）……六四……らいてう
二日間（小說）……六五……田原祐子
沈默（散文詩、飜譯）……八四……ホオ
秋海棠（俳句）……八九……白雨
ヘッダ、ガブラ合評……九一……HとY
表紙繪……長沼智恵子

太鼓の音

小金井喜美子

毎朝々々一日も缺かさず「今日は」と高聲でいひながら、藤井の臺所へ盤臺を擔ぎ込む魚米は威勢の好い男である。此間若い衆に賣り上げを持ち逃げせられて、「仕方がありませんや前厄だから」と云つて居たから、家へ來初めた四年前は二十だつたと見える。

持主は幾度か變つても此土地で名の賣れてゐる料理屋の萬金も、近年になつては若い衆を廻らせる事にしたし、又角久も若い衆の五六人も置いて手廣くやつてゐる。藤井の家へも長年廻つて來るから新らしく魚屋を入れるには及ばぬけれど、すぐ近所で急ぎの時に間に合ふのでいつか出入になつたのである。まだ華族方へ用人に取入つて御出入になる樣な力はない。手を擴げても失敗じるからと、極つた得意を几帳面に廻つてゐる。河岸から歸ると一人の若い衆と荷を分けて、一番に景氣よく擔ぎ込むのは藤井の臺所である。貰ひ物があつたりなどして斷ると、「困つたなあ、今日もだめな日かな」と急に弱つた樣な顏をす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。一番初めに藤井で買はぬと、其日は一日賣れが悪いといふのである。

世話好き話し好きでよく近所の噂をして聞かせる。得意で頼まれると、女中でも借家でも一生懸命に手間暇を惜まず捜して歩く。或時は言ひにくさうに「手紙を書きましたが、噓字があつて笑はれるといけませんから一寸見て下さいませんか」といふ。其晩持つて來たのを見ると、假名交りのやつと書いた手紙かと思つたのは大違ひ、なか〳〵の達筆で、子供の時世話になつた郷里の先生へ送るといふので、形容詞澤山の長文である。「唯今は實業に從事罷在り近き將來の發展を望みつゝ奮勵致し居候」などゝ書いてある。中に一ヶ所あけてある。「こゝはどうしたの」と聞くと、「國を出たのを何と書いてい丶か分らないから、あけて置きました」といふ。出發かと聞けばさうではない逃げた樣なものですといふ。それでは出奔かといふと、それではいけぬといふ。出發でも出奔でもない仲位のはないかといつてみんなに笑はれた。

小學校も卒業しなかつたさうだが、新聞を讀むのが好きでいつも三種づゝ位とつてゐる。毎夜どうでもそれを讀まぬ中は寐ぬといふ、全く新聞學問なのである。前日讀んだ新聞で分らぬ事があると魚を賣りながら大急ぎで聞かうとする。「それはのぢかいいけかい」とか、「ばちてはないの」とか、目のきかない奥さんが聞き覺えの詞を遣つても、其返事はせずに夢中になつて、其魚の鱗をひいたりなぞして困らせることがある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

丁度其魚米が出入を初めて間もない頃であつた。「お梅さん、すてきな奥さんが引越して來ましたぜ、大きな丸髷に結つてね」と頭の上で珍な手附をして、「お使ひに出た時廻つて御覧なさい、背が高いよ、お前さんの倍もあらあ」と、いつも背の低いのを苦にする女に逃身をしながらいつて聞せた。

其家は藤井の庭先の狹い道を隔てゝ、向ふ側にある小ぢんまりした平家である。庭が廣いのに向ふは低いのだから、緣側へ立てば木の茂つた間から其家の屋根だけが見える。女中達も使に行くのに裏通りは餘り通らぬので、いつ越して來たか誰も知らなかつた。

それから間もなく或る日魚米が小鯛を澤山持つて來て、「十枚程賴まれましたからよけい持つて參りました、大負けにしますからお取りなすつて」といふ。どこでと女が聞いたら、「裏のお家の七夜です」といつた、成程どこやらで赤兒の泣く聲がすると思つた。

其明る年の春の花盛りとなつた。藤井の家は高いので下の家の軒と土塀とが平行してゐるといふのだから、近所の花を一目に見下す。一體に單瓣の櫻が多い。客が來て好い景色だと褒めると「櫻は遠くのを見るのに限ります、花の間は短いのに、年中葉が落ちたり毛蟲が附いたりしますから」と勝手なことをいつてゐる。この裏の家には非常に美しい八重櫻があつて、みんなあたりの靑葉になつたあとで獨暮春の眺めを添へた。満月の夜などはそこだけぼうと白くなつてゐた。やがてそれも靑葉になつてしまふと、いつか其傍に一本

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の長い竿が立つた。餘程長いのと見えて低い地面に立てゝあるのに、藤井の家の軒と平行位になつてゐる。何にするのかと思つたら、或朝鯉幟があげられた。「裏のお家のは坊ちややんでしたね」と女中がいふ。「道理で泣聲が高いと思つたよ」などゝ話し合つた。

どういふものか節句が濟んでも其竹竿が片附けられぬ。緣側へ立つと木の少し蔭にはなるけれど、直正面なので苦になつてならなかつた。それも暫くでいつか目馴れてしまつて、今迄遠方の火事の時方角を見るのに、遙かに見える肴町の湯屋の煙筒の左か右かといつたのを、お隣の竹竿の左か右かなどゝいつてゐた。

やがて雪が降る。硝子戸越しに庭を見ると常よりも一際よい景色に見える。裏の道のふだんはちつとも見えぬ電話線の上に、重さうに雪の積つたのが二筋見える。又例の竹竿に風の吹廻しか、片面だけに雪のついたのが目にたつた。

いつ頃からか其家で太皷の音がし出した。「もうあの家の坊ちやんも太皷をうつて遊ぶ様になつたねえといつてゐた。餘程太皷が氣に入つたと見えて、外に玩具が宛がつてないかの様に其音ばかりする。

其年も暮近く魚米が何か話のいつてに、「小さい子のある家のおつ母さんの病氣はいけせんね」といふ。それは裏の家の奥さんが長く煩つて居る様子を見て來ての話してある。「それはお氣の毒ね」といつて、それからは何だか太皷の音が耳につく様な氣がする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年があけて二月になつた。ある日思ひ立つて日當りのよい緣側の硝子戶を女中と一緖に拭きながら「どうしたのだらう、此二三日は太皷の音が聞えないね」と奥さんは聞いた。「左樣でございますね何だか此節はお醫者樣のお車らしいのがよく見えます、お惡いのではないでせうか、魚米が來たら聞いてみませう」。「何聞かなくてもいゝがね」。果して女中の察した樣に病氣が重つたので、親類へ預けられたのであつた。四五日して人の出入が繁くごた〳〵して來た。とう〳〵奥さんは二十餘りで死んだのである。お氣の毒なと誰も〳〵いつた。

お葬式の日は狹い道が混雜した。生垣の上から白い蓮や旗や輿が見えた。今日は連れて歸つたと見えて子供の泣聲やそれを賺す人の聲がする。

今迄よりは年取つたらしい女の聲がし出した。折々坊さんのお經の聲がする。其外は每日〳〵又太皷を叩いては何かだゝをいつて泣く聲と、それを賺す女の聲がするだけで、主人といふのは物を言はぬ人か、又は聲の低い人か何を言ふのも聞いたことがない。

雨曝しの竹の竿はまだ其儘に立てゝある。かくて一月二月過ぎた。或書過に大分ごた〳〵する樣子で、法事かしらまだ一週忌にはなるまいにと思つたら、女中が目を丸くして「奥樣、あのお子さんがなくなつたのですつて、今お葬式が出ますよ」といふ。「まあ可哀さうに、やはり女親のないので手が屆かなかつたかしら」といつたり、「あんまり泣いてばかし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐると思つたよ、何か病氣があつたのだね」といつたりした。もう久しく聞き馴れた太皷の音も聞かれまいと、生れてこの方聲ばかりで一度も顔を見なかつた子の、小さい輿を生垣の上から見送つた。

又二三ヶ月過ぎた。或る日使に出た女が歸つて「魚米の前を通りましたから、なぜ今日は來ないのといひましたら、方々の仕出しがかちあつてすみませんでした。お裏の家へは今夜お嫁さんが來ます、それを十五人前程引き受けましたからねと大騷ぎをしてゐました」といふ。もう女中は悔ではなかつた。其夜は果して車が待つて居るしいつ迄も賑かであつた。

明る朝氣が附いて見たら例の竹竿はなかつた。植木屋が掃除に這入つてゐた樣だから片附けたのだらう。

それからは變つた事もなく月日がたつた。一年程してから又赤兒の聲がする樣になつたが別に氣にもかけなかつた。

すると昨日の午後、ふと其家から太皷の音が聞えた。小さい子が打ち初めるので輕い音である。二三年前に聞いたのと少しも變らぬ。座敷に居た奥さんの耳にはそれがひどい響の樣に思はれた。又今度のも太皷を打つ樣になつたか、早く育つ物だと思ふよりは、又何だか同じ事を目の前で繰り返されるのではあるまいかと思ふのである。――完――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人ごみの中を行きつつ

與謝野晶子

○

唯だ「人」と、若しくは「我」とのみ名乗るぞよき。
雜多（ざった）の形容詞を附け足さんとするは誰ぞ。
大と云ひ、小と云ひ、善と云ひ、惡と云ひ……
そは事を好む子供の所爲（わざ）なり。

○

何物をも附け足さぬはやがて一切を備（そな）へし故なるを。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

相共にその自らの力を試さぬ人と行かじ。
彼等の心には隙あり、油断あり。
よしもなき事ども――善悪と云ふ事どもを思へるよ。

○

過去は青き、酸き、充たざる、如何にありしとも。
今は甘きか、匂はしきか、
今は舌を刺す力あるか。
君よ、今の役に立たぬ果實を摘む勿れ。

○

商人等の催せる饗宴に、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我の一人まじれるは奇異ならん。
我の周圍は目にて滿ちぬ。
商人等よ、晩餐を振舞へるは君達なれど、
我の食ふは猶我の舌の味ふなり。
されど商人等よ、おのおの其最近の所得に就いて誇りかに語れ
我はさる事をも聽くをよろこぶ。

○

行くほどに街は暮れて明るき月夜の海となり、
人は魚の如く跳り、ともし火は波の如く泡立つ。
地に落つる人影にわが影の入りまじる如く、
われは他の遊ぶを遊ぶ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われは知る。つひに一人なり。

○

かの歯車は断間なく動けり。
静なるまでいと忙しく動けり。
かれに空しき言葉なし。
かれは彼の中に一切を刻むやらん。

○

すべて異性の手より受取るは、
温かく、やさしく、匂はしく、派手に、
胸の血のわりなくもときめくよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女のみありて、
女の手より女の手へ渡る物のうら淋しく
おなじ茶人の間に受渡す言葉の寒げに質素なるかな。
このゆゑに我は女の味方ならず、
このゆゑに我は裏切らぬ男を嫌ふ。
かの袴のみけばけばしく淋しき女の群よ、
かの傷なき紳士よ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一諾

大村かよ子

一

夫れ一陽の春になれば、
世の波たつも立たざるも、
天に奏する樂の音に
地のもの笑みて舞ふとかや。
世は戰の修羅なれど、
小柴綻ぶ、鴨川の
主なき家の垣の內、
なよかに春の風ぞ吹く。
軒は傾き、欄は朽ち、
荒るゝがまゝの庭の面。
いつの野分の名殘りにや、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

落ちしがまゝの夢には、
春の若草萌えいてゝ、
昔の榮を語るらし。
聲を收めて、遣水も、
翼休息めて、鶯も、
たゞしめやかな春の庭。
花にうまゐの蝶の夢、
さむる期もなき靜けさを、
風のそよぎか、山鳥の
羽音か、いさゝむら竹の
篠の搖ぎか、垣の外。

二

重籐の弓の肩先きに
なびく柳の波を分け、
ゆたにのりたる武者一騎。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

荒れし垣ほの、枝折戸を、
深きまびさし傾けて、
やがて、暫時を點頭いて、
こぶし花咲く木の下に、
繋ぐ、連錢鹿毛の駒。
鬣なでて、顧みて、
「待よ、我が鹿毛、こゝにして、生れしこゝの我が家居、暫時の名殘り惜ませよ。」
草はむ駒を顧みつ、
咲きも亂るゝ山吹の
花間を分けて、しづ〱と。
頭高に負ひし箙には
三十六の黒羽の矢、
朽葉の直垂ほの見えつ、
武太刀に枝をおしわけて、
黒革縅しの大荒目
搖るゝ一歩に、はら〱と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山吹の花ぞ散りかゝる。

三

「見るに、思ふに、忍ばるゝ此の庭木立、彼の軒端。月見るとては、父君と倚りし露臺は、幾秋のあらしに影も止まらず。殘るかたみの礎に、こゝと一と本立つ蕨。花吹くとては母君と飽かず眺めし紅梅の、めづる人なき幾年を、去りとも春は笑みにけん、散りすぎし花の、今も、なほ、忘られぬ香ぞ、身には染む、母屋の階、孫廂、朽ちしながらもしかすがにむかしのあとぞ忍ばるゝ。めのとを馬になぞらへて、一人の弟義嗣と競べ馬より興じつる彼の細殿も、渡殿も、ありしあたりは若草の處えがほに萠えいてゝ。

四

「春や昔の春ならぬ、實に我れのみは、もとの身の、ありしや現、見しや夢。父君もなく母君も、たゞ世に一人の弟とは、あゝ、かりごもの世とは云へ、しのぎをけづるかたき同士。今宵召されて、白河殿、身は上皇を守護の役、伯父爲義の麾下にして、立つべき功は、此の胸に。」

任りとたゝいて弦走り。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どつかと座すや、孫廂。
またも昔の思はれて、
固めし拳いつしかも、
ゆるみて、糢糊茫然と、
仰ぐみ空のゝどけさを、
破つて一聲、若駒の。

五

こは、いぶかしゝ。鹿毛ならぬ、
思はぬ駒の、いななきと、
小手をかざせば、築山を
こなたへさして、武者振りも
床しき曹司、たゞ一騎。
かぶとの鷹角（たかづの）打ち反（そ）らし、
緋縅しのよろひ、褐色（かついろ）の
直垂、いとゞ花やかに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二十四さしたる小中黑、
頭高に負ひて、もつ弓は
七尺二寸の塗籠籐。
怒物造りの尻鞘も、
汀に州の貝鞍も、
雪とふりしく花はら〳〵。
またがる葦毛のたてがみに、
つもる落花も、さながらに、
射向けの袖に花をうけ、
花をうけては、空仰ぐ
おもざしの、こは、誰れ人ぞ、

六

おゝ、珍らしや兄者人。
思はぬ見參のうれしやと、
駒を櫻にのり捨て、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きざはしのもとにひざまづく、
花か艶なる若武者の
顔つく／＼とまもりては、
詞もなくて打ちそむく
頼嗣が前に、二三尺、
きざはしのぼり近づきて、
のう、なつかしや、兄者人、
兄者人よといざりより、
からりと、太刀も、弓も捨て、
かぶとをぬいて、孫廂。
菱縫の板にとりすがり、
つく／＼と仰ぎて、兄者人、
なつかしや、のう、兄者人。
よべど、頼嗣眼をとぢて、
石とばかりに厳然と。

七

「なつかしやのう兄者人。弟に候、義嗣に。」
射向けの袖を打ち控へ
すがらんとすれば、はらひのけ、
「何處の人ぞ、おん上は。さても武者振り美しゝ。さぞや、櫻の武士ならん。」
から〳〵と打ち笑ひ、
「ふたまた武士の弟は、我れ源の頼嗣は、憚りながら世に持たず。ご粗匆あるな、おん曹司。」
立たんとすれば、草づりを、
しばしと義嗣ひかへつゝ、
此はあまりなるお言葉と、
唇かみて、打ち震ふ
こぶしに拂ふ血の涙。
「武士なればこそ今日の我れ、四面は楚歌の世にも立つ。推察あれや、兄者人。」

八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「かたじけなくも、上皇に我が父君のうけにける海山の惠み我れ知れり。まだいわけなき頃にして、親にわかれし孤兒のわれにかゝりし年比の伯父爲義が限りなき慈愛の程も我れ知れり。知つて上皇に弓をひく、我が此の心。兄者人、苦しき弓矢帶ぶる身を、推察あれや、兄者人。」

ふり仰ぐ花のかほばせを、
眞下に睨めて、二歩、三歩。
なほすがりつく手を拂ひ、
「かしましゝ此のむしけらめ。」
叫ぶ一喝、取りなほす
鐵扇、丁と、義嗣が、
雪の頸筋、紅の花。
「打ちて御心ゆくならば、思ひのまゝになし給へ。」
つく双の手の唐紅。
青ざめし顏に打ち仰ぎ、
なほふり放す賴嗣の
太刀の石突、後より

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふるふ腕にとりすがる。

九

「其お怒りはさりながら、暫時兄上聞きてたべ。思ふ十とせのその昔、たゞかりそめの戰ごと、忘れしもせじ、のう兄上、兄上と爲朝と敵にして、我は義朝と味方同士、彼れ彼の山を我が陣に、兄君の陣は彼の木立、此の庭にしてたゝかひし紅葉の秋のありにしを。其の折なりき、義朝と命の限り味方同士、父とも兄とも別れても、味方同士よと約しつる其の一諾の忘られず。戰ひはたゞかりそめの遊びなれども、一諾は、一諾は我が肺肝の、心の友に諾しつる約をいかでか、兄者人。ゆるし給へや、兄者人、生れて武士の我れ、いかで此の一諾を忘れんや。よし世の人は知らずとも、われもの丶ふの、一諾を、一諾をいかで、武士の

十

我れ武士の義嗣が、此の一諾を打ち忘れ、伯父爲義が麾下にして、我が上皇を守護の役、そむかば、義朝が此の約に、たゞ一諾を忘れつる甲斐なき武士と、後ろ指さゝれんよりも口惜しきそしりは、外にあるものを。伯父爲義がいとし姫、我れにゆるせし露姫は伯父御

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が館にあるものを、此の一諾を打ち忘れ伯父御が招ぎに走せ行かば、女々し男となりもせん。生れて武士の此の義嗣、此の手、此の頸、此の脛の、よしやみじんになればとて、なでふ、めゝしと、めゝしとはいはれていかで忍ぶべき。推察あれや兄者人、御心なほしておん笑顔、お情けに此れ兄者人、ゆるして、我れを、義嗣を、呼ばして武士の男ぞ」と。

兄上頼み上げますと
後ろ姿に手を合せ、
引敷の草づり、そと引けば、
詞はなくて頼嗣が
閉づる眼をはら〳〵と
何の雫のこぼるらん。

十一

「さばかりの武士が心根のおん身と我れは露知らず過しゝ言のはづかしさ」
ゆるせと弟の手を取りて
立ち戻る母屋の廂の間、
「ゆるし給ふか兄者人。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひれふす頸の唐紅、
きと眼をとめて頷きて、
取りくつろぐる引合せ、
懐紙を取り出だし、
血糊拭へば飛び退り、
勿體なしや、兄者人、
嬉しやとばかり縋り付く
義嗣が手を引寄て、

「陣に立ちては敵同士、暫時も共に斯くあらば、人の詞のわづらはし、やがて西方浄土にて昔語はせん程に、はや別かれぞや、さらばなり、戰ふとても義嗣よ、戰ふまでの其の手足、いたはれよ、兄が願ひぞや。」

いらへはこゝと緋縅しの
鎧の袖の露しぐれ。

十二

葦毛の頭たてなほし、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いざと一騎、義嗣が
乘らんとするを袖ひかへ、
「待てよ、義嗣、露姫にことの葉はなぞあらざるか。」
いなゝく葦毛のたてがみの
白波に花ぞ戯るゝ。

「此は有り難し、さりながら禿びし矢立ての筆にては亂と亂るゝ此の心書かん術さへ我れ知らじ。」

たなびく花の夕映か、
たけきをほこりのものゝふの
顏にも茜の色ぞさす。

「恐れあれども、兄者人、伯父御に背きし此の身をば、さこそ姫にもうらむらめ。よしなにつくろひいひてたべ。此のたゝかひの和とならば、必ず連理の枝ぞかし。もし勝敗のわかれなば、勝つも負くるも、義嗣は行くに任する雲水と必ず、姫に、兄君よ。」

また一としきり花吹雪、

「來よやと姫のつね日比、たのめし春は身に仇の此の戰ひの世となりぬ。共にとちかひし此花も陣に見る世の是非もなさ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

せめてとかたへの櫻が枝
折りて「兄君此れをしも、かたみと姫にまゐらする
願ふは是れのみ、いざさらば。」
さらばとばかり勇ましう
一むちあてゝ一と走り、
落花を蹴たつる若駒の
蹄の音の消えゆけば、
きらめくかぶとの白星も
花の吹雪に消えて行く

十三

花の吹雪に消え去りし
弟が行衞のび上り、
つまさき立てゝ見送りつ、
鹿毛の手綱も打ち捨て、
枝折戸を背に賴嗣は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ちからなげにもくづをる丶。

「姫は此の世にあるものと、可愛や弟が枝折りつる此の八重咲きの花ざくら、さ丶げん姫は幽明の境をへだてし西の國。伯父御に背きし義嗣が罪をかよわき身にうけて、白梅かをる朧月に、守り刀の露と消し優しき姫が心根を、語らんと、さは思ひしが、なまじ首途のもの丶ふに力落しをさせまじと、別る丶きはの一と言を、かりそめならず喜びて、此の一と枝を托しつる我が義嗣が眞心は、草葉の蔭にも、うけまさん。白河殿のおん召しに、遅參の罪はありといへ、いざ駒にむち、露姫が、おくつきどころ、此の花を、弟が詞をさ丶げん」と、

みかへる遠の山の端に
夕日は消えて、消えやらぬ
一とむら雲は花の刷毛。
たそがれの幕一重おり、
一重おりては、一としきり、
しきるや雪の花ふヾき、
むせぶか、鹿毛の一と聲の。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よそ事

岡田八千代

朝稽古の子供が大抵歸る時分、留吉は、のそつと二階から下りて來た　火鉢の前には母親のみつ代が稽古扇を帶にさしたまゝ一寸一服といふ形で立膝をして煙草を呑んで居た。

「お早う」

みつ代はぢろりと上眼で見たまゝ何とも言はなかつた。

母親に向ひあつて緣起棚を後にまづと座り込まうとした留吉も、此樣子を見てとると、

「フン。」

と鼻の先で笑つて、腹の中で「少々お冠曲りか」なんぞと思ひながら、仕方なしに座るのは止して開けはなした直ぐ次の臺處へ出ると流しの前へぢつと座り込んで不性らしく手を延ばして眞魚板を掛けた羽目にさしてある、ライオンの齒磨袋を突きさした房揚子を取つて、やけに袋の中を掻き廻して口へ含むと、流しの下に伏せてあつた磨き上げた銅の金

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

盥を流しへがちやんと置いた。それもてきぱきともする事か、ぐずり〳〵とやるのである。
呑みかけた煙管を手にしたまゝ目も離さず之を見て居たみつ代は、イヤといふ程火鉢の椽で煙管を拂いた。

「オイ〳〵留公。何處で顔を洗ふつもりだい」

「洗ふ可き處で洗ふのさ。」

と後も見ずに水瓶の蓋を取らうとする。

「生意氣な事をお言ひでない。その水を用ふのはまア御免をかふむるよ。」

「何故さ。」

「何故さもよく言はれたもんだ。その水が減りやア誰が汲むんだよ。」

「誰でも手の空いてるものが汲まアね。」

「お前の手はいつになつたら空くんだい？」

「まづ暫くは覺束ないね。」

「ほんとに呆れ返つてものも言へない。もう今日からは、水道の處へ行つて顔を洗つて來な。二十歳にもなつて、なんだ。朝と言や十一時の鐘が鳴らなきや起きやしず。夜と言や、どこをまアほつつき歩く處があるかと思ふ位だ。稽古の子のことを見な。六ッや七ッの子が、六時にも七時にもずん〳〵出て來る。第一あたいの顔に係はるよ。母親はその日〳〵

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を暑いとも思はず稼いで居るのだ。誰の爲にぼろを下げたり、頭を下げたりしてると思つてるのだ。手前の姿を見ろ。べらしやら／＼しやがつて、誰のお陰だと思つてる。お時はお時で、踊の師匠や三味線の師匠ぢや一生頭が上らないなんて、人が苦勞して育てた事は思ひもしねえで、お構ひなしに相手を見つけてサッサと行つて終ふ、後に殘るのは役にも立たない手前ばかりだ。見つともないから、せめて八時にも起きられなけりや一日起きて貰ひたくないね。あゝ明日からは、一日寢て居るが好い、どうで起きたつて何の役にも立たない奴だ。寢てろ、寢てろ、もう一生でも二生でも寢て居たい丈寢て居ろ。」

みつ代は、手に持つて煙管をハタと留吉に投げつけた。煙管はツと之を避けた留吉の脇をかすつて流の椽へ當るとポッキと二ッに折れて轉がつた。

「おつかない、おつかない。」

留吉は口の中に呟やきながらコソ／＼と金盥を持つて水口を出た。其處は小さな庭のやうになつて居た。山の手の地處でも立て込んだ此處いらでは、これから日盛りといふ頃を隣の二階にさえぎられて、もう日の蔭つた中に垣根にからませた朝顏は、小さな花がしぼんで、枯れたやうな蔓はもう實勝になつて居る。留吉は裏木戸を出際にいたづらにその蔓をグイと引いた。母親が朝やつて置いた水がハラ／＼と落ちた。

ドンを打つても留吉は歸つて來なかつた。みつ代は、夫でも、よもやに引かされてお晝

飯を待つて居たが、一時を打つても足音もしないので、揚板をカタ〳〵と淋しさうに漬物を出してさら〳〵と御茶漬をかつこんだ。心の中では、あれ程に言はなくてもよかつたとしきりに留吉の歸るのが待たれた。二時頃になつて亦學校がへりの子がポツ〳〵と稽古に來る時分、向ふ横町のせんべ屋の淸ちやんといふのがお稽古に來がてら、留吉の持つて出た金盥を持つて來た。

「留は又お前さんの處かい？」

みつ代は又ぢり〳〵とした。餘に月謝も呉れずに稽古によこすさへあるのに。なんかと言つては留吉の肩を持つて煽だてるこの子のお袋が憎い。

「今日は御師匠さんは肩が張つてるから休んでお呉れ。」

みつ代は、つけ〳〵と言つて其處にある長唄の稽古本を枕にして舞臺脇へゴロりと横になつた。それでも半時とならぬ中に亦起きなければならなかつた。多くない弟子は間を置いてはポツリ〳〵來るのであつた。お淸は歸るでもなくおとなしく夕方まで遊んで居た。みつ代はそれでも稽古に立たぬ程意地の惡い女ではないのである。もう三日も一ッ處をやつて覺えないのを、怒りながら幾度も〳〵手を持つやうに敎へて居た。

留吉は夜までせんべ屋に話し込んで居た。そしてせんべ屋のかみさんが、

「どうして、そんなに怒られたのさ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と大丸髷の根を掻きながらいふのを受けて、
「ヘンお極りゝ昨夜はれこが來ねえのさ」などゝ親指を出して見せた。投げ出して兩足をバタ〳〵とやりながら、よそ事のやうに母親の事をいふのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ある夜

尾島菊子

つぎ子は夕方飄然と家を出た。何處を何う行かうと云ふ的もなく、平常通り慣れてゐる道を唯足の向くまゝに歩いてゐる。足は自然に電車の方へ向いた。田町の角から褄を持つた粋な女が二人、緋縮緬の蹴出しをチラ／＼見せて、さも誇り顔に出て來た。此界隈では此種の女を見るのが珍らしくはないから、殊更に振向く者もなかつた。つぎ子も此方へ越して來て一年ばかりの間、外へ出る度に嫌と云ふほど見せつけられて、今では最うあまり目障りにもならない。唯晝日中ドス黒い顔をして、髪を壊したまゝ、粗末な服裝も構はず平氣で其處等歩くのを見ると、何となく不快で堪らぬ。それに十五六の器量の好い雛妓でも見るなら、眼先が華かで可愛いだけに惡い心持もしないが三十面の阿莫摺れたのを見ると、自分を耻かしめられたやうに腹立たしくなつて來る。

「彼年をして溜池あたりの小つぽけな藝者屋に勤るてゐる位なら、何故思ひ切つて死んで

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

了はないのだらう。」

何だか焦々した心持になつて、何時でもこんな事を考へる。けれど、然う思ふ下から又、

「寧そ藝者なんかの方が暢氣かも知れないわ。末は野となれ山となれ、唯其日〳〵を樂しく暮して行くのだもの。嫌な日もある代りに、心のどん底まで思ひをやる樂しい日もあらう。眞面目一方の人間は、今の世の敗北者だわ。正義につけの、道德に從へのと、古い敎訓に慣らされた自分なぞ、幾ら人間を眞面目に解釋して、正義や、道德を重んじたとて、結局それが何れだけ自分を益してゐるだらう。第一正義だの道德だのつて、人間が勝手につけた理窟に、何の標準があるか？世間の人間が表面ばかり飾つて、裏面で色んな醜い行爲をしてゐるのも知らずに、自分一人が豪さうに正義呼はりをして、そして普通の女には迚も耐へられぬ困難をつゞけて行く……世間ではそれを嘲笑つてゐるではないか。ひねくれた彼女の形相を見ろと、冷たい眼で笑つてゐるではないか。」

忌々しい、と云ふ氣も起つた。

つぎ子は溜池の停留場に立つた。角の洋食やへ洋服の男が二三人入つて行く。と直ぐ二階から其連中の頭が見えた。電車は何れも滿員である。つぎ子は行く的が定まらないので、何方へ乘らうかと迷つた。考へて見ると何の爲めに斯うして出て來たのか自分ながら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

解らぬ。家に居れば唯頭から壓へつけられるやうなので、此儘にしてゐたら氣狂ひにでもなりは爲まいかと思ふ位心が焦燥つので到頭出て了つた。何をそんなに焦々するのだらう？

「元子さんは遂にお嫁に行つて了つた。私を殘して他所の家の人になつて了つたのだ。今頃は私の事を何とか思つてゐてくれるか知ら。それから彼の人……あんなに元子さんを思つてゐた人……元子さんも始終好きだ〳〵と云つてゐた人……彼の人の事を何う思つてるんだらう？　あゝ元子さんは意志の強い女だ、と云ひたいけれど、一面から云へば薄情な人だ。戀人を捨てゝ、親友と別れて、そして何處かの知らぬ人の許へ行く……それで淋しくも何ともないのだらうか？　地位があつて名譽があつて、それで財產があれば、最う戀なんか入らないのか。不思議だ、不思議で堪らぬ。元子さんだつて人間の温かい眞の情愛に渇してゐる女ではないか、何うして彼人を思ひ切りよく打捨つて行つたのだらう。そりや元子さんの云ふ通り、幾ら雙方で好きだと思つたとて、到底夫婦にはなれないのだから——と一應尤もだけれども、夫婦になれないと云ふ規則が何處にある、皆自分自身で勝手に定めてるのではないか。年下の夫を持つのが耻かしいの、若い男は財產がないの、心が變り易いから末が案じられるの、と悧巧は悧巧な考へに相違はないけれど、私は親友を失つた今の淋しい心持に較べて、彼の人の辛さ切なさを一入深く感じる。可哀想

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

によく〳〵激しい戀に落ちたればこそ、なけなしの財産を擲ち、自分の名譽を捨てゝも、元子さんの滿足を買はうと努めたのではないか。元子さんだつて血もあり涙もある女だ、それ程に思ひつめてゐる彼の人の心をようく知り拔いてゐる筈である——さう〳〵こんなことを能く云つたつけ。晝はいろ〳〵と忙しいのに紛れてゐるけれども、夜になると思ひ出して、獨りで泣いてゐるつて……

あゝ元子さんは可哀想だ。私が若し私の力で出來るものなら、晝と夜と元子さんの夫を取り代へてやりたい。何とか云ふ今の夫になつた人が、無理矢理に貰つた爲めに、元子さんも泣く、私も泣く、彼の人も泣く、三人が泣いてるんではないか。天下に何の罪もなく、美しい憧憬搖籃に眠つてゐた三人の夢を破つて、自分一人が勝利を占めた男が憎い。いやだ〳〵。最う何が何だか分らぬ。何うでも好い、何うでも好い、各自に皆勝手にするが好い、世の中の事は皆斯うしたものなんだらう。お互樣に好きな人とばかり無事に一緖になる事が出來たら、そしてお互に嫌になると云ふことがなかつたら、あんまり單調で爲方がない。昨日までは命も入らぬと誓つた中でも、今日は早や路傍の人になる、そして又他へ命を賣りに行く……戀の切り賣り、命の安賣り……妙な事が流行つたもんだ。」

つぎ子は取りとめもなく思ひ亂れた。頭が破れるやうにピン〳〵する。

「歸つて寢ようか知ら!」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とも考へた。けれど又あの解らずやの母から、元子さんの悧巧さを讃め稱へられて、何時までも夫を待たずに愚圖〳〵してゐる自分の意氣地なさを誹されるのが如何にも嫌だ。親でなかつたら、彼の口を縫つてやりたいと思ふ。

全體世の中に親くらゐ勝手な者が何處にある。子供に施すべきだけの義務も果さないでおいて、好い加減親風を吹かせて、そして我子に向つては如何な無理を云つても、可いものと許してゐる。子の迷惑さは如何だらう。然かも私なんか女ではないか、女が精々働いたつて何れだけの事が出來よう、大抵に考へて見るが可い。此上未だ私を苦しめようと云ふなら私は斷然家を出て了ふまでゝある。

それから世の中に妹とか弟とか云ふ者ほど厄介なものはあるまい、自分共が後から生れたからとて、何で先に生れた者を苛るか？先に生れた者は何故に後から生れた者の責任を背負ふ義務があるか、子の責任は全部親にある筈ではないか。親に若し其責任を負ふだけの意氣地がなかつたら、爲方がない、迷惑だけれど各自に覺悟を極めるまでゝある。何も先へ生れた姉ばかりを責めると云ふ法が微塵もない、親の爲めに恐ろしい迷惑を受けて困り切つてゐる處へ、後から出て來た連中にまで苛られちや、實際最う此儘自滅するばかりである。あゝ親や弟妹ほど荷厄介なものがあらうか？、自分一人を責め殺して、そして滿足してゐる彼等の心を思ふと、もう堪らぬ。出ませう。家の者と別れて自分一人になつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て了ひませう。如何に氣樂になるか知れない。我身を犧牲にして親に孝を盡したつて、弟妹を可愛がつてやつたとて、何にならうぞ、自滅！自滅!! 自滅の他はない。

あゝ早く獨りぼつちの靜かな生活がして見たい。

つぎ子は一時に嚇となつて體中の血が火のやうに燃えた。來ては停まり、停まつては去る電車が、幾臺となく自分の眼の前を活動寫眞のやうに過ぎた。

空はだん／＼濃くなつて、田町の通りに浴衣の人影が淡く浮んだ。パノラマへでも入つてるやうだ。洋食屋の後の邊から、さはりの好い三味線の音が洩れて來た。

こんな風に無暗と頭腦の混亂した時に、浮世離れのした絲の音締めなど聞くと、聲一杯カッと怒鳴つてやりたいやうに腹が立つ。つぎ子はスタ／＼と葵橋の方へ歩いた。

「まるで氣狂ひだ。」

自分ながら冷りとした。何うしたら此焦々した心持が靜まるのだらう。此心、此思ひを、此儘此處へ形にして現はすことが出來たら、それを小包にして誰かの處へ送つてやりたい！ 誰の處へ？

誰もない、誰もない、そんなものを受取つてくれるやうな嬉しい人間が何處にあるものか。

世間の夫は妻と苦樂を共にしようなんて云ふけれど大の僞、苦は妻にばかり、樂は自分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひとりさ。

元子さんは其樣ことを千も萬も承知して、そしてお嫁に行つた。可愛い人――好きな人を他所にして、髭面の氣難かしやの理窟云ひの處へ行つた。

元子さんは先方から云ひ寄る人を嫌ふ女だ。何の彼のと紋切形の定まり文句で說き落さうとされると、背に水を浴せられたやうに竦として嫌になると云つた。

元子さんは人形のやうに美しい顏をして、小鳥のやうに可愛い聲をして、雛のやうに艶麗な容姿をして、それであのまあ心の强いこと、彼の人を泣かして振り切つて行く度胸の豪いこと。噫々。

「妻君入用」

電車道について虎の門を曲る時、角家の商店の硝子戶に、こんな貼紙があつた。

つぎ子は偶と立停つた。

ふつと噴き出す。美しい微笑が浮ぶ。硝子戶の中には電氣が華かに流れて、椅子に相對してゐる白い洋服の男が二人、ゆつたりと葉卷を燻かしてゐる。

「何方が妻君入用の主人なんだらう」

つぎ子は好奇心に驅られながら偶と上を見た。軒の周圍には米國の二字が矢鱈に書いてある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つぎ子は少時中の樣子を見てゐた。

「まあ何てい面白い性格の主人だらう!」

又ニコリと笑つて歩を進めた。あんなに手輕な事で、或男と女が一生結びつけられて行くなら、お互に手數が省けて眞實に世話がない。今の世だもの、應じる女がありさうなものだ、とこんなことも考へて見た。

日はもうとつぷりと暮れて了つた。

つぎ子は遂に何處へ行かうと云ふ心も起らなかつた。例ならば此樣晩は屹度元子さんと二人で歩いてゐた。此方で誘ひに行かねば、先方で誘ひに來る。一日逢はねば何となく物足りないやうな氣がするので、大概毎日顏を合はせぬ日はなかつた。元子さんは能く心の迷ふ女であつた。今の家へ嫁附くまでに何れほど迷つたもんだらう。けれどいざ斯うと決心して了ふと、大切の〳〵好きな人をも犠牲にして了ふ。

元子さんは人には容易に涙を見せぬ代りに、自分ひとりで心の中に血の涙を絞つてゐたことは、私が能く知つてゐる。

「ねえ、世の中に貞女になる位つまらないことはないわ。」

これが元子さんの口癖であつた。私等二人はこんな話をしながら夜となく晝となく、唯漫然として能く外を歩いた。然うして今年の夏は何處か靜かな海岸へ行つて暮さうの、寧

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そ二人で家を持たうかなど〻、こんな事を語り合つた。
　又或時は粋な商賣でもはじめて世間を驚かしてやらうか、と妙な反撥心も起つた。
　それもこれも、今になつて考へて見ると、お互に獨り住の所在なさから、つい暇つぶしに考へた空想に過ぎなかつた。
　此度逢ふ元子さんは最う何々夫人と云ふ肩書附きである。そんなあられもない空想は最早や過去の夢だ。あゝ夢！夢!!　何處かにも夢だ夢だと云つて悶えてる人があらう。
　あゝ淋しい夏！今年の夏はほんとに淋しい！
　つぎ子は急に便りない感じがした。能く二人で通つた道だと思ひながら、又ふら〳〵と溜池の方へ戻つた。袖を吹く涼しい夏の夕風が肌に冷たく秋風のやうに泌み渡る。
「明日からの自分を何う爲ようッ」
　つぎ子は戀人にでも去られたような果なさを感じて、熱い涙が込み上つた。
　自分一人でこんな淋しい、やる瀬ない思ひをしてゐる位なら、寧そ彼の人を呼んで來て一緒に泣かう、そして二人で元子さんの薄情を怨まう！
　いやいや、元子さんは薄情ではない、元子さんは女の踏むべき道を踏んで行つたのだ。怨んでは濟まぬ。元子さんの立場として考へたら、彼あするより外はなかつたのだ。元子さんは私の勸めた通りに、又彼の人の望んだ通りになるやうな、そんな女ぢやない。情の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

爲めに自分を忘れて了ふには、あまりに理性が勝つてゐる。
私は今更になつて最う何も云はぬ。只元子さんの將來を幸福なれと祈るばかりである。けれど自分は淋しい。朝に晩に晴れやかな笑ひ聲も聞かれず、美しいあの顏も見られぬ。
「女には女の友達が絕對にない筈のものである。それが眞理である。」
過日誰やらがこんな事を云つたのを思ひ出した。あゝ矢張り然うなんだらうか。
つぎ子は同じ新町の通りを三度廻つた。もう家へ歸らう、歸へつたら頭を縛つて直ぐに寐よう、と斯う考へながらぐる〳〵ぐる〳〵と步いてゐる。夏の夜の街は一種の色彩を帶びて何處となく華かであつた。
「おや、今お歸りですか、私、先刻からお宅へ上つてゐましたの。」
黑つぽい單衣を着た色の白い細面の女が、向ふから淋しさうな姿でトボ〳〵と步いて來ると思つたら、先方から直ぐに聲をかけた。それは七八年前の舊い友達で、四年ほど前に夫に亡れた人であつた。
「まあ、大變に久らくでしたわね。能く入らしつたこと。さあ行きませう。何うも失禮しました。」
つぎ子は思ひがけないと思つた。
「ほんとに久らくでしたわ。逢ひたい〳〵と思ひながら、相變らず貧乏暇なしでね。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほヽヽと心細い笑ひ方をする。つぎ子は貧乏の話なんか、もう飽き〳〵だと不快に思ひながら、

「でもまあお變りがなくつて何よりね。私の家も相變らず、昔も今もあのまんまよ。」

「けれど私は、何時も蔭ながら貴女を羨ましいと思つてゐますわ。ほんとにお氣樂で被居るんですから。」

不思議なことを云ふ人だ、とつぎ子は可笑しかつた。パン屋の横を曲つて靜かな街へ入ると、五六間步いて、

「此家よ。」

と、つぎ子は先に門の中へ入つた。

「お客樣よ。きみ子さん！」

其聲を聞きつけて、奧から妹の鶴ちやんがひよいと顏を出した。

「逢つたの、まあ好かつた。大變お待ちになつてゐたのよ。姉さんは又默つて何處へ出かけたの？」

つぎ子は知らぬ顏をして自分の室へ行つた。其跡からきみ子も默つてついて行く。後の方で一寸、

「ほヽ又上りました。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、鶴ちやんに云つてる聲がしたばかり。さあ、何卒此方へ。どうも久しく、御無沙汰ばかりて相濟みません。」

二人は改めて挨拶をした。つぎ子は焦々する此心を鎭めさしてくれる爲めに、今夜――一年あまりほどで突然にこんな不意な人が來たのか、と思つた。然うして手取り早く現在の生活狀態を訊いた。きみ子は八才になる女の子をつれて、今は實家にゐるが、いろ〳〵面白くないことばかりだから、假令薄給でも勤めに出たいと思ふ、何卒世話をして下さいな、と賴んだ。

「何故貴女にお嫁に行かないの？」

つぎ子は素氣もなく、こんなことを云つた。

「ほゝゝ、一度行つたぢやありませんか。」

「もう一度さ。」

「もう一度？」

「えゝ。」

「幾度行くんでせう？」

「幾度でも……　…」

「まあ、では貴女は何うなの？」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これから嫁くてせうよ。」

「…………」

きみ子は寧ろ意外と云ふ顔附をした。

「何をそんなに不思議がるの？」

「だつて、ほんとに然うか知ら。」

「えゝ、然うですとも、だから貴女も、行らつしやいな。勤めなんてつまらないからお止しなさい。若い娘がお嫁入支度の爲めとか、家政上の都合で出るなら、未だしも聞えてゐますけれど、三十面を下げて、今更袴をつけて貴女、外を歩かれて？ねえ、きみ子さん、考へて御覧なさいよ。今から勤めなんかに出て、それが何になると思ふの。十圓や十五圓の月給を貰つて、毎朝々々割引電車で慌たゞしく家を出て、そして終日下らない仕事をさせられて、夕方疲れ切つて歸つて來たつて、誰が讃めてくれて？ねえ、誰が貴女の勞働を感心してくれるでせう。誰もないわ。却て世間ぢや笑つてよ。何ていあの見素ぼらしい姿だらうなんて、如何に輕蔑されるか知れないわ。然うして自分ばかりが辛い目に遭つて馬鹿〳〵しいぢやありませんか。お止しなさい、お止しなさい。今の世は再婚が恥ぢやないことよ。反對に我を通してゐる女の方が憎まれるのよ。それでも憎まれながら立派にやつて拔けられるだけの技倆があるなら可いけれど、別にこれぞと

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云つて一つの藝に秀てゝゐると云ふ話でもなしさ、何を便つて今後暮されると思ふの。何も一度夫に死別れたつて、又其次も死別れると云ふ、そんな法はないわ。若し萬に一又死別れたら、それまでの運命だと思つて諦めるのよ。

だからきみ子さん、私は貴女のお爲めを思ふから云ふのよ。早くお嫁附きなさいな。子供はお母樣に賴んでおきなさいよ。何うせお嫁にやる子でせう。然うなさい然うなさい。そして勤めようなんて云ふ考へは、全然捨てお了ひなさい。幾ら威張つてゐたつて、女は途に弱者よ。」

つぎ子は机に片臂を突いて滔々と辯じた。きみ子はつぎ子の口からこんな言葉を聞かうとは思はなかつたので、異樣の眼をしてつぎ子を見てゐる。

つぎ子はきみ子の慌てぬ樣を焦烈たいと思つた。何故何時までも〳〵斯う愚鬪々してゐるのだらう、と歯痒くて堪らぬ。

「小學校の先生や女事務員などになる位なら、藝者になつた方が增しよ。」

と口頭まで出たのを引込めた。

きみ子は呆氣に取られて穩かならぬつぎ子の調子を窺つてゐる。

「ねえ、きみ子さん、貴女屹度お嫁に行くと決心がついたら、私及はずながらお世話するわ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯うなれば、何うでもハイと云はさねば止まぬと云ふ權幕である。
「ありがたう。けれど、子供の事が氣になるしね。それに嫁に行くつたつて支度も何もない裸體の地藏樣ですもの。爲樣がないぢやありませんか。ほゝゝ。」
此人は直き笑ふよ、とつぎ子は焦り〳〵した。
「支度なんか何うでも可いわ。ねえ行らつしやいよ。行くと決心なさいよ。ね、きみ子さん！」
「さあ。」
「さあなんて、考へることなんかないわ。勤めは一時の凌ぎですもの、それよりも永遠の安全を計らなきやならないでせう。」
「そりや然うよ。では家へ歸つて今夜とつくり思案するわ。」
大分折れて來たと思つたら、つぎ子は何となく愉快でならなかつた。
きみ子は心の中に思ふことを十分に云ひ得ずして、遂々十時ごろまでつぎ子のお談義を訊かされて歸つた。跡でつぎ子はしみ〴〵氣の毒な人だと思つた。
夏の夜は森として深けた。表を通るハモニカの音の凉しく消えた後、つぎ子は獨り兀然と机の前に坐つて、虚空を睨んでゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つぎ子の癖で、夜を深けるに從つて、頭がだん〳〵明瞭して、次第に冷靜になつて來る。暮れ方氣狂ひのやうになつて、外を駈け廻つて歩いた時分の熱した感情が今は最うしつとりと落着いて了つた。机の上の窓からそよ〳〵と冷たい夜風が吹き入つて、洗ひ髪の庇を通して地肌の毛穴のひとつひとつに心地よく、すう、すうと泌み込む。

「あゝ好い晩！」

つぎ子は夜の世界を悦ぶ女であつた。腫れぼつたくなつて眠さうだつた眼がパッチリ開いた。隣りの室から微に洩るゝ家人の寝息と、カチ〳〵カチと刻む時計の音と、犬の吠聲と、何處かで閉てつけの惡い雨戸を時折ガタリ、ガタリ云はせるのと、吾妻下駄で靜かに通る優しい齒音と、代り〳〵に耳に入る。つぎ子は立つて藤椅子にぐつたりと凭れかゝつた。見慣れた机、本箱、戸棚、琴、花瓶、床の軸など、何れもこれも同じ中に、偶と今日繪を書く弟が取り代へた生物畫の額に眼を止めた。別に好いとも拙いとも感じない。只眼を開いてる間に一心に繪筆を握つてゐる平和な彼の心が懐かしかつた。そして弟の寝息が最も美しいと思つた。

森々と深けて行く夜半に、つぎ子は眠つてるでもなく覺めてるでもなく、椅子に凭れたまゝ夢現の境に恍然として自分を忘れた。そして此儘夜が明けなかつたら、私は如何に幸福だらう！　最う何も望む所はない、斯うした心の平和……それに一番私に取つての幸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

福であると、自ら信じた。
明日の心も測り知られぬ浮薄な戀人など、何に爲よう、もう何も入らぬ、何にも入らぬ。平かな我心！　これさへあれば私は永遠に幸福である。元子さんが何？　戀人が何？親が何？　弟妹が何？　何であらうぞ？　況して信をおかれぬ夫が抑も何者か？
私は今夜のやうな靜かな晩に、ひとり斯うして冥想に耽つてゐる、此間の心の平和を以て私の最も快樂とする。私は斯うした眞の孤獨の寂寞の中から或快感を見出して、自分獨りを慰める。あゝ好い晩！
つぎ子は平常人に接してゐる間に、何時も或寂し味を感じた。一人が二人三人と餘計になるほど、我身に迫る悲哀と寂寞を覺えるのである。故に晝の煩はしさを嫌ふて、人の夜靜まつた夜半を好む。世界に夜ばかりであつたら誰の心も平和になるだらう、虛榮も僞善も何にも入るまい。あゝ平和！
ひとり！ひとり!! ひとりに限る。假令心を一つにした戀人があらうが、夫があらうが、結局自分は遂に自分でひとりのものである。戀人と云ひ夫と云ひ、或範圍を乘り越して自分を奪ふことは絕對に出來ぬ。
私は斯うして何時までも獨りて自由に考へて、ひとりを樂しむ。
つぎ子はぼんやりとした眼を半開きては、又閉ぢた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遠くて電車の軋る音も絶えた。夜はいよ〳〵靜閑となつた。庭の立木に時々强くあたる風の音がした。チリンと風鈴の音色!

つぎ子は其儘スヤ〳〵と眠つて了つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

稲の花さく頃

祐　子

生命なほ我れにようなし戀なくて
　うつろの如く生きん日思へば。
いかづちか嵐かなゐをほりする日
　きのふの如く暮るゝが悲し。
大きさの限りとなれる朝顔に
　双葉の殘る淡きかなしみ。
かくもなほ戀ひわたるとは我れにさへ
　告げじと思ひよそ事をいふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たまはりしもの只一つはぐゝみて
　大天地に生きんとぞ思ふ。
人住める國かとかなしいほえ波
　君が越え行く南の島(メキシコに行く友に)
今日にして始めて知りぬわれをさへ
　欺かぬ日のすくなかりしを。
思ふことやめよと君は云ひますか。
　などミイラにと告げはせずして。
地の底の三千丈の暗闇を
　堀るにも似たるわざと人いふ。

(青鞜發刊の日)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お高

岩野清子

正雄は晩酌の盃を手にしながら

『ね　お高、お前にも永い事苦勞をかけたが、いよ〳〵金を出して呉れる人も見つかつたし、座も明けられる事になつたから、あしたから色々準備もしなければならない。』

酒の加減ばかりでもない晴れやかな顏色をお高は嬉しさうに見て、

『おやさう、それで私も一安心しました。』

德利をもつお高の手はいつもより浮々としてゐる。希望にかゞやく眼には盃の中のなみ〳〵とあふれさうな酒の樣な喜びの充ちた波がたゞよつてゐる。で、お高はまだ何か云ひたりない喜びを云ひ繼がうとするのを、正雄は『それに就てだ』と遮ぎつて置いて、『此處から毎日出掛けるのも不便だし、三崎町の家へ引揚やうと思ふのだが、豫々お前にも話してある通り、家には、出戻りの姉と娘がゐる。』かう云つて正雄は盃をチャブ臺に置いて、一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寸お高の顔を見た。

『エヽ、それはもう前からお話しがあつたからよく承知してゐますわ、姉さんはお姑さんだと思つて萬事御相談して色々家風を敎へて頂きませうし。先妻の娘さんも丁度私も子がないし、自分の子と思つてお世話しますわ。』

お高はかう云つて、抱へ車夫まで置いてあることは云つても、旅館や生活は萬事に不自由なのを思ふと、よし小姑や繼子があるにしても、一家の主婦になつた方がどの位張合があつていゝか知れない。と心で思ふ。

『然し、娘はとにかく、姉は隨分氣むづかしやだからね。それに己れの留守中殆ど一年半二年近くも家を切り盛して居た位だから、それだけ確かりして居る。又それだから、威張りも強い。て、お前も隨分面倒な辛い事もあるかも知れない。』

此時正雄は、憐む様な眼でお高をぢつと見るのであつた。

お高はもう明日からは〇〇座主のおかみさんで、多くの出方や役者から大事にされる身になるのだ、と云ふ事を思つて獨りでうれしくつて〳〵たまらないのだから、家庭の小事、小姑や繼子の氣兼位なんか立派に辛棒してみせると意氣込んで居る。だから正雄のかう云ふのを、親切は嬉しいが、却てそんなに子供らしく思はれて居るのが齒痒い位に思はれるのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『その事なら、もう心配なさいますなよ。假令どんな辛い事があらうと、鬼ではなし蛇ではなし、こちらで下手に出てさへ居れば、姉さんだつて女ですもの、さう苦にしたものでもありますまいよ。』

『まあお聞き、』と正雄は引取つて置いて、下においた盃を取り上げて、咽喉をしめしてからと云ふ樣に一呼吸にぐつと飲む。

お高は直ぐまた酌をしようとすると、生憎酒がみんなになつて居た。

『もう一本つけさせませうか？』媚る樣に少し首を曲げてから云ふと、

『なにもういゝよ。安心したせいか、平日よりは醉つた位だ。飯にしよう。』と伏せてある茶碗を起す。

『前祝ですもの、今夜は如何樣にあがつたつてようござんすわ。』

例になくこんな事を云つて、お高は無性にこ〳〵してゐる。自分の周圍の總てが昨日迄とは打つて變つて光りに充ちてゐる樣な氣がするのだ。お高はもう、ぢつとして此喜びをしまつて置けない。只身體がから浮上る樣で、思ひきり大きな聲で笑つて見たい。此旅館にゐる客を皆んな集めて御馳走をして、驚かして遣りたい。出來るなら一日一晩續けさまに御馳走ぜめにして、〇〇座と云ふ大芝居の座主のおかみさんの氣前を見せて、後々までの話しの種に殘してみたい、と思つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

然し正雄は、矢幎り茶碗をつき出してゐるので、お高は遂にそれへ飯をもつてやりながら、自分の浮々してゐるにの引きかえて、機嫌よくはしてゐるが、平常と大して變つた樣子もない正雄の落付いた顔をみると、私はこんなにそは〳〵した心持ちなのに、所天はどう思つて居るのだらう。座を開ける樣になるまでは隨分やき〳〵してゐた癖に、それが都合よく思ふ通りにならうと云ふ今日になつて、大して喜しさうでもない。若やあんなうそを云つて私を空喜びさせようとするのかしら、とも思つて見た。いや〳〵そんな事はない、矢つ張り事實なのだ。さうしてみると、男は心の大きいものだから胸の底では嬉しくつても、女のやうに顔色にまで出さないのだらう。自分の所天はそんな輕々しく喜怒を表はす樣なそんな安つぽい男ではないのだ。と思つて見ると今更ながら正雄の男らしい濃い眉や廣々とした額までが一層人格を上げた樣に見えるのだ。

正雄は二口三口默つて食べてゐたが、思ひだした樣に、

『それでだね、お前が辛棒する氣にしても、今急に一所にならない方がいいかも知れない。俺はかうしたら如何かと思ふんだ。暫くどこかに家を持つてゐて、もう少し氣樂な生活を續けてみたら、尤もおれは座が開くと忙しくなるから毎日來る譯にはいかないが、一週間に一度位はどうか都合して來るようにする筈なんだ。』

お高は正雄のかう云ふのを、給事の盆を膝にのせて兩手でそれをまさぐりながら聞いて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐたが、深く氣にも止めなかつた。只々明日からの明るい華やかな生活が、今にも自分の後ろに迫つてゐて、自分を喜べ〳〵とそゝる樣だ。そして一日も早く否一時間も早く自分の死場所と定つた三崎町の家に行つて見たい。森田の家の主婦として切り廻して見たいと思ふ。それも明日だと思ふと見なれた電氣の光さへ今夜はいつもより明るい氣がする。

『なんのあなた、私だつて雇人の五人や十人立派に使ひこなして見せますわ。今こそ用がないからぼんやりした氣のきかない娘の樣に思つてゐらつしやるかもしれないけれど、これでも私の育つた家は、日本橋の通りで葉茶屋をしてゐたんですから、隨分小僧や番頭もゐましたわ。さう云ふ者や出入りの人達の使ひぶりは小さい時から見たり聞いたりしてゐたのですもの――』

お高は正雄の言葉を打消す樣にかう云つてつんと取すました樣な顔をした。

『強いて止める譯ぢやあないが只おれの老婆心さ。お前がさう云ふ決心なら明日此處を引拂ふ事にしよう。俺はすぐ座の方に行くからお前は、――知つてゐるね家の番地、――その方へ一足先に行くがいゝ。』

お高は其夜眠られなかつた。明日からは大きな芝居の座元のおかみさんだ。あちらへ行つたら自分のある限りの働きをしてみせて、所天にも働き所のある女房だと思はせる樣にしよう。出入りの者にも、森田のおかみさんは利口な人だと云はれるやうにしてみせやう。こ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んな事をはてしなく思つてゐた。

二

正雄は二年ばかり前の春狂言に客の不入の爲、大損をし、それがため役者も三日目あたりから座に出なくなつた。それも座を開けるのに引幕まで質に入れた程の苦心をした後なのだから其手傷は中々多きかつた。債權者は毎日嚙付く樣に迫る。しまひには差押とまでならうとしたので、自分が居てはとても仕末がつかないと思つて、家族のものと相談した結果身を隱して行衞知れずになつた體にし密かに上野の山下の山下館と云ふ旅館に隱れてゐた。そして再擧をはかつて居たのだ。だから、旅館住ひには不似合な抱車夫を置いたりしてゐた。

お高は、朝、正雄を送りだしてから、手廻りの小道具などを取り緬めながら、そわ〳〵した落付かない氣分で鏡臺の引出しを明けて見たりしめて見たり、物を同じ處へ容れたり出したりしてゐたが、急に正雄を送つて行つた車夫がもう歸つた時分だと思つて、丁度廊下を雑巾がけしてゐる宿の下女を見て、

『姉さん、重藏が歸つてゐるなら、お世話樣ですがちよつと呼んで下さいな。』と、かう云つた。

『若い衆さんなら、今帳場で家のおかみさんと話してゐました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さう云ひながら又三尺ばかり拭いてから、階子段の上から、
『若い衆さん、おかみさんが呼んでいらつしやいますよ。』と、疳走つた聲で叫んだ。
重藏がお高の座敷の廊下に黑鴨仕立の體裁のまゝて立つと、お高は昨夜眠られなかつた神經の高ぶつた青白い顏で、
『これからすぐ私は三崎町の家へ行くからね、仕度をしてお呉れ。それから荷物はお前に賴んで置くからね、後から運送屋に賴んで送らしてお呉れ。』
さう云ひながら、お高は今一度鏡臺に顏を寫して血色の惡いのを氣にして手て二三度顏を擦つてから、思ひきつて立上つた。
『姐さん、長々御厄介になりましたね。あちらの方へいらしつたら是非寄つて下さいよ。芝居位いつでも見せてあげますわ。』
こんな愛嬌を云つて、重藏の先に立つて階子段を下りた。
ともすれば居眠りの出さうなのを强いて目をみはつて車に搖られて行つた。
車の上でも、お高は樂しい華やかな夢を畫がいてゐた。水道橋を渡ると、もういよ〳〵そこだと思ふと、重藏の足が早すぎる樣に思はれた。今迄はまだるつこしい樣に思つてゐたのに。
お高は急に背中が重くなつた樣に感じた。雇人小者多勢の有象無象を甘く統御して行く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身の心忙しさを思つたからだ。然し腕の振ひ甲斐もあると思つてみると、自分が急に豪くなつた様に感じて嬉しくもあつた。

留守中の下女など、どんなおかみさんかしら、早く見たいなどゝ思つてゐるだらう、など他愛もない事を考へたりした。

じやり〳〵と玄關敷石をすべる轍の音にきつと我に返つたお高は衣紋を直して取澄した態度になつた。

二年ぶりで歸る主人の爲めに玄關の正面の衝立を見せて障子は一ぱいに開いてある。敷臺の板の間も鏡の様に奇麗になつてゐた。

『御免下さい。』と重藏におとなはして、自分は車から下りると、十八九の婢が怪訝相な顔をして、

『誰方で被入いますか。』と一寸腰を屈めて云つた。

『私は高ですがね。』お高は少しつんとした顔で云つた。

『お高さん――』と婢はまだ考へてゐる。

お高はもしや家が違つてゐるのではないかと思つた。そして後に立つてゐる重藏を振向いて。

『こゝが森田の家に違いないかね。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、婢が引取つて、

『手前は森田ですが、あなたはどんな御用で。』

そんなら正雄からとうに話しのあつた筈だ、此女はまだそれを知らないのだとお高は今度は悉皆落付いて、

『そんなら姉さんは御承知の筈、お前さん姉さんに高が來たと取次いでお呉れ。』と主婦らしい口調で云ふと、婢は急に横柄になつたお高をむつとした顔で見て返事もせずに奥に引込んだ。

間もなく前の婢が出て來て、卑すんだ様な笑を眼元に見せて、

『こちらへ』と導いた。

それでもお高は、いそ〳〵と導かれた座敷に通ると、そこは八疊の間で庭に向いた明るい座敷だ。

『お前はお高かえ、度々噂さは旦那から聞いて居たが、色々世話になつたさうだね。』

これが噂にきいた出戻りの姉さんか、隨分權高い人だと、お高は辭儀をした首を上げると、花菖蒲をいけてある床の間を背にして二人の女が座蒲團の上にゆつたりと座つてゐる。

『オヤ』とお高は思はず心で云つた。お高は其時自分の胸をどしんと何かで打たれた様に感じた。眼がぐら〳〵した。昨夜眠られなかつた神經の疲れと目前の驚きに氣が轉動し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

左の方に座つてゐるのは、どこやら面ざしの似た處のあるので、それが正雄の姉だ、とは分つたが、右の方に座つてゐる三十格好の丸髷結つた女は何だらう。お高はそれを見透さうとする樣にぢつと見つめてゐると、左の方の女が『お前はまだ知らないかもしれないがこの人は。』と一寸右の方の女を見て、『正雄の家内だからね。』

ぎろりと右の方の女の眼が光つた。

つい先刻まで心に畫いてゐたお高の華やかな夢は其冷やりとした眼の光でさめた。お高は大きな石が自分の頭の上にずしんと落ちた樣な氣がした。一言の挨拶も出來ない中に熱湯の樣な涙がお高の頰に止度なく流れた。膝の上の手にも落ちた。

『欺された。欺された。口惜しい。』

とお高はかう幾度も叫んださうして正體もなく前に俯伏した。體中の血が涙になつて絞れるかと思はれる樣にいつまでも〳〵涙が止まらなかつた。

それを冷やかに見下しながら、左の方の姉は、

『正雄はお前に、どんな事をいつてゐたか知らないが、家内も今迄二年と云ふもの隨分苦勞して來たのだからお前も其笞りてね。』

お高はもう、そんな事を聞いては居ぬ、只泣きに泣いた。思へば正雄が憎い。今迄よく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も／＼私を欺した。今に歸つて來たらどうしてやらう。お高は歯が粉々にくだけるかと思ふ程食ひしめた。手はぶる／＼と痙攣する。繰返し／＼正雄が憎い／＼と思ひ詰めた。

『〇〇座の座主で、今は失敗して山下館にゐるのだが、なに一旗上げさへすれば。』と云つたのを仲人口と知らずに片付いてきたのだのに、と其仲人までが自分を欺いた惡魔だとお高は傍にゐない仲人に噛みついてやりたい程口惜しい。

道理こそ、取次に出た婢の樣子が變だと思つた。さう云へば昨夜正雄のいつた事もひし／＼胸に當る。

早く正雄に逢ひたい。今迄ぬけ／＼と私を欺むいてゐた面の皮をひんむいてやる。

自分の部屋とあてがはれた狹苦しいじめ／＼した薄ぎたない四疊半に引取つてからも、お高は一晩中、口惜泣きに泣いた。

瞼が眞赤に張れ上るまでお高の泣はやまなかつた。熱病の樣に身内がほてつて枕元のランプの火がぐる／＼と廻つて見えた。

『私は仲人があつて立派に片付いて來たんだ。』疳走つた聲であたりに聞えよがしにお高は幾度も叫んだ。然し此廣い家の中で誰一人の自分の味方になつて呉れる人はないのだと思ふとヂー／＼と油をすふランプの音と共に一歩一歩薄暗い穴の中に引込れる樣な氣がする。お高は思はず邊りを見廻した。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

正雄が歸つたらどうしてくれやう。」と廊下を通る人の足音に耳を澄した。鼠のあれる音にも起上つて障子を細目にあけて玄關の方をすかして見た。

——完——

花芙蓉

らいてう

病床にて

鳴神や、仁王の臍の紙礫。
今朝の秋蟲歯の數をかぞへけり。
蚊帳越しの曉寒し白芙蓉。
芙蓉さくや白鳩の眼の紅に。
火食せぬ人のむすびて秋の水。
太腹の和尙めでたき踊哉。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二日間

田原　祐

江戸川から電車に乘つた美知子は入口の隅に腰かけたが、それでも眩しい樣な氣がした。そして美知子には早く姉さんに逢ひ度いと云ふ心よりは、タツタ今迄寄宿舍に居て、外の二十人三十人の人達と餘り異はない樣に動いて居たものが、此の三十分計りの間に、自分一人皆から引き離されて、果てしもない暗闇に導かれつゝある樣な現在を、今更不思議なものゝ樣に打ち眺むる心計りが働いて居る。

春日町で乘りかへて、白山で降りた時には、も早や爭はれない秋の風が身にしみる樣で、天の川は銀砂子をふりないた樣に冷たく見えた

重い足を引きずる樣にして坂を上り詰め、せゝこましい途を幾つか曲つて、始めて尋ねる番地が見當つたのだ、改まつた心持にて、まだ上戸をおろさない格子をソツト明けると照り返しがギラリと光つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「御免下さい」
低い、それでも底力のある聲で斯う云ふと、内からは待つてた様に直にハイと云つて、立てつけの障子に大きな男の影が映つた。やがて出て來て、
「美知さん」
と男は云つた、美知子はギョッとしたが、其の瞬間それが速見である事を知つた。
「姉さんが待つてお出ですよ」
男は重ねて斯ういつた。
「はい、存じて居ります、私逢ひに參つたので御座います」
美知子は始めて男の顔を正面に視た。度の強い近眼鏡が光つて居る。
「とにかくおあがりなさい」
と云つた男の詞には返辭もせず、その跡に從いて階子をのぼると、上り立ての部屋の入口に姉の民子が立つて居た。
「姉さん」
「美知さん」
どつちからも同じ様な事を云つて座に就いたが、其の先きは何と云つてよいものかと、互に先きの口振りを待つてる様に、三人共おしだまつてしまつた。美知子は部屋中見廻し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て、姉の持物らしいものが、中位の信玄袋と洋傘一つしか見えないのと、此處が速見の宿であると云ふ事とで、姉の今度の出京が兩親承知の上ではないだらうと推した。

「お民さん僕は一寸出て來ます」

手持不沙汰氣にモヂ〳〵して居た速見は斯う云つて座を外した。二人共もう散歩の時間でもあるまいと思つたが、別段止めもしなかつた。その足音のまだ消えない中に、

「美知さん、矢張り私は駄目よ」

と姉の方から口を切つた。

「駄目つて姉さん、新潟の方がなの」

美知子はかねて姉が新潟のある實業家から貰はれて居るのに、またいつもの樣にグツ〳〵云つて兩親を困らせて居る事を薄々知つて居たので、直に新潟といふ代名詞を使つた。

「エヽ、それもさうだけれど、私の駄目だつてのは、私が父さん達の子として、直江津の家に居なければならない、其の事がなの」

民子は斯うい乍ら思ひ出した樣に押しやつてあつた茶盆を引き寄せて、茶を入れかけた。見れば其の後には、菓子が三つ四つ殘つたまゝの竹の皮やら、お箸やらが散らばつて居た、美知子はそれを見ると、自分が來る迄、速見と二人で食べて居たのかと思つてい

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やな氣がした。
「姉さん、私ならお茶なんぞ入りませんよ。御馳走になりに來たんぢやないんですもの」
いつもの癖とは知ながら、つい今のいやな感じを口に出してしまつた。
「エヽ、だけどお茶だけは」
と民子は云ひわけらしく云つて、火鉢越しに美知子に手渡しゝた。
「そしたらもう姉さんは直江津に歸らない氣で出て來たんですか」
美知子は先づこれを確めなければならないといふ語氣で尋ねた。
「勿論。だから美知さんにも逢ふまいと思つたんだけれど……ヒョットしたら一生もう逢はれないかも知れないと思つたから」
ほつれかゝる鬢の毛を煩さ相に掻きあぐる姉の手が、かすかに慄えて居るのを美知子は見た、其の銀杏返も昨日今日結つたものではないらしい。
「何ですか私には姉さんの心持がよく解らないんだけれど、そんなら姉さんは、新潟にも行かず、直江津にも居ないで、何處かで獨り暮しをしやうとおつしやるんですか、だけど姉さん何處に居たつて知れないつて事はありませんよ、それに假りにもこゝになんぞ來るんですもの」
美知子は始めから「何故速見の處に來たんだらう」といふ事が、解つた樣で解らなかつた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から、さすがに正面には聞きえもしない事を斯う遠まはしに言ひ出した。
「だつて此處だけが日本ぢやあるまいし、樺太だつて臺灣だつてあるわ、それにもうお母さんだつていゝ加減手古摺つたんだもの、生きてる事さへ解つたら、呼び戻しになんぞ來る根氣はないにきまつてるわ」
美知子は此の位の自暴半分の事は、何時も聞かされて居た、が、それが手紙である時は姉が何かを求むる心と、それを抑へ様々々々とする家の人の心とが、水と油の様にして一緒になつてる事に無性に同情されて、親に對して恨みがましい文句を並べた返事を出した事もあつたが、今、面と向つて斯ういふ捨てやりな事を云はれると　何故かしら、多少腹立たしい様な氣がする、美知子は此の心の働きを妙だと思つた。
「いけない〳〵、そりや姉さん、親の心を知らないにも程があるわ、だつて手段としては多少押しつけがましい處があるかも知れないけれど、根は姉さんのためを思つての事だもの。其の親の深切だけを買はなきやいけないと思ふわ、それより姉さん、何處に行つて何をして暮らさうといふんですか」
またもとと同じ事を尋ねた。
「何處だか私も知らない、だつてどうせ私は高松の家の子ぢやないんですもの、定まつた家のありつこはないわ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

遉がに後の方は口の内でつぶやいたのだが、美知子はこれを聞くと同時に、もう今晩は駄目だと思つた。姉の狂人じみた行爲も原因はこゝにあるのである。たまに休暇なんぞで歸つた時、美智子と二人になると、今迄ハシャイで居た人だとも思はれないほどシンミリとなつて話ずる事がある、其の果ては多く、「私なんぞ誰の子だか知れやしないんだもの」と云つて泣き出しては、手がつけられなくなる事があつた。その癖、つい前までは、孤兒教育がして見たいだの、私に一瞬間でも心から尼になりたいと云ふ氣が起りさへすれば、立派に頭を圓めてしまうんだけれど、と云ふ樣な事を本氣で話した事を、今美知子は思ひ出した。

二人はまた沈默の内の人となつた。

美知子は逆上せた顏を風に當て樣と思つて中窓の障子を明けると、直前は廣い墓場になつて居て、二三本の木立の下には雑草が生ひ茂つて居る。窓の下には石がごろ〳〵ころがつて居て、干したまゝの浴衣が不氣味に見えた、美知子はこんな處が東京にもあるのかしらと、不思議に思つて見て居ると、下でがらりと戸を明ける音がした、そしてそれが速見らしかつたので、急に歸舍ねばならぬ事を思ひ出した。はねとばされる樣にその座に歸り火鉢の緣に肱枕ついて掌で顏を蔽うて居る姉の肩に手をかけて、

「それぢや姉さん十時迄に歸る樣につて先生に云ひつかつてるんですから、私これで歸る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わ、そして明日は日曜だから朝から來て、此の問題を何とか片をつけませうよ、いゝてせう、そして姉さんも、もうお寐みなさいよ」

美知子は袴の紐をしめなほし、自分の懐中時計を見て「まだ三十五分あるから大丈夫」と獨言いひながら立ち上つた、身體がフラ〳〵する樣だつた。

何とも云はない姉を今一度振り返つて階子を降りると、下には速見が立つて居た。

「アヽお歸りですか、僕美知さんの好きなもの買つた來たんですよ、しかし學校の人だから無理には止めますまい。」

何時も自分が時間々々と云つて居たのを覺えて居た事かと少々おかしい樣な氣もしたが、それでもとり濟して、

「どうもありがたう御座いますが、今晩は失禮いたします。本統にお邪魔いたしました」

と叮嚀に頭を下げた。

「いやなんにも。それぢや僕電車道まで御送りしませう」

と速見は下駄を穿きかけて居る。

「ありがたう御座います、ですけれど私俥に致しますから、もう澤山で御座いますの、どうも恐れ入りました」

もう堪らぬ程歸りが急がれるので、ソコ〳〵に出樣とすると、今度は宿の主婦らしい中

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年間の人が出て來て。

「どうも御粗相様でございました」

と手をついた、美知子は少しうろたへた。

「私こそ御挨拶も致しませんで……此の節はまた姉がいろ〳〵御世話様になりまして」

と仕方なしにも一度頭を下げて、洋傘を持つと直「お静かに」「それぢや明日は日曜ですから」などいふ聲を聞き捨てに逃げる樣にして家を出た。空は益々冴えて果てしもなく星が輝いて居る。直に通りがゝりの俥に價もきめずに乘つて、幌を降ろさせた。

美知子はホツト息をついた。同時に姉からの直接の電話て、不承々々に臨時外出を許して呉れた舍監の顏が頭に浮んだ、續いて同室の無邪氣な下級の人達の事などが、別れてもう二三日も逢はないものゝ樣に思はれる。するとまた「どうせ私なんぞ誰の子か解つたもんぢやない」と身煩えしてる姉の姿が目先きにチラつく。それが妙な事には、タッタ今逢つて來た速見の宿ではなくつて、直江津の家の樣である。華やかな着物を引つかけ散した中の八疊に四五人の藝者が寢そべつて何か唄つて居る、其の中には二人の從姉妹も居ていり豆か何か喰べてる、一番上の姉の子が二三人、皆の背中の上をアッチに渡り、コッチに渡りしてキャッ〳〵騷いで居る。其處に直上の姉一人納戸の箪笥にもたれて雜誌を讀んで居る、かと思ふと物狂はしくそれをなげ出して、ヂット疊を見詰めたまんま嘆息をついて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居る、やがて此の姉の姿だけが、いろ〳〵の想像の中に殊に鮮やかになつて、次第に浮き出た様になると、あととはグル〳〵廻つてる様だ。すると今度は速見といふ事が、其の渦中に一滴の水の様にしたゝつた、同時にすべてのものは忽ち消えてしまつた。

速見！々々、何かしらん今日は速見に侮辱された様に思へてならない。

速見は二三年あと、伯母の家が戸塚で下宿屋をして居た頃宿つて居た某大學の生徒である。そして其處の伯父が保證人だつたので、美知子はチョイ〳〵顔を合はせて居た。處が去年の冬休みの事、國の民子から暫く出京すると云つて來たので、美知子は歸らずに、伯母の内で落ち合つた　民子と美知子とが別々の意味で速見を忘られぬ者と思ふ様になつたのは其の時からである。

美知子は近所のミルクホールで待ち合はせた事を思ひ出した。そして姉もまた其の頃から速見の事を一言も口に出さなくなつた事を忘れはせぬ。勿論伯母もそれを氣づいて居て、美知子には民子の事を、民子には美知子の事をそれとなしに云つた、が休暇がすんで美知子が學校に歸つた時には、民子も越後の人となつて居た。それだから美知子は其の後速見に接する機會は多かつたけれども、其の時からして、伯母と姉とに對する譯の解らぬ意地で、速見とは一切交通を斷つてしまつた、そのためには自分で行つて判をもらつて來ねばならない場合にも郵便で濟した事さへあつた、が間もなく伯母の内でも下宿をやめて小石

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

川に引越した。それでも速見の消息のあらましは、時々來る姉の手紙で間接に知つて居た。速見が今本郷の素人屋の間借りをして居る事もそれで知つて居たのである。

民子が何處までも速見を二人の友人として取り扱つて居る事を説明しやうと努めて居る態度は明らかに見えた、それが明かに解れば解るほど美知子は不快で堪らない。速見に對してもいやな感が募つて、先きの日の自分の行爲が時々やるせない程後悔される様になつた。が、姉に對しては單に憎い、厭だと云ふだけでは居られない。兩親を捨て、故出を捨てた、其の姉が將來の方針もハッキリとは定めずに速見の宿に落ちついて居ると云ふ現在の事を思ふと、矢張り姉の身内には濁つた淫奔な血が漲つて居るのだと思はざるをえない。姉が何時も口にする『誰の子やら解つたものぢやない』といふ反抗的の詞は、姉にしては親をのゝしり、自分の境遇を呪つて居るのだらうけれ共、其の實矢張り、自分の行爲の責任を自分に置くまいとする勝手な云ひ草だと云ひたくなる。

「速見さんの處に來る位だもの、どうなるか解るもんか」斯う思ふと、泣いても呪つても訴へても、どうす事も出來ないある凝りを生れるときから抱いて居るのが姉の運命だと云ふに歸着する様に思はれる。そして其の姉の妹なる自分の現在の心持に思ひ至つた時、美知子は思はず襟をかき合せた。目を塞ぎ耳を蔽ふてあらゆる音と色と、光りとから遠ざかつて、此のまゝ闇を辿つた方がむしろ安樂な、そして自分達にふさはしい生活ではあるまい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か、それならば自分の現在は此の運命に逆行しつゝあるので、自滅の路を取つて居る事となると思ふた、美知子の頭は益々亂れて殆んど車上の人であると云ふ意識さへ失つた。
カタリ轅をおろした車夫は、汗を拭きながら幌をはねた、ハット思ふ刹那美知子の目に映つた寄宿舍の黑板塀は、怖ろしい牢獄の鐵の扉の様に見えた。

二

翌朝美知子は同室の人に搖り起された。
「美知子さんお母様が今入らしつて待つていらしつてよ、そして先生に御目にかゝつてる間に外出のお支度をなさいつて」
「えッ母が？　私を迎ひに？」
斯う問ひ返した美知子は先を越されたなと思つた。
「お玄關も御掃除最中でゴッチャだつたもんでお氣の毒だつたわ」
前掛の紐をいぢりながら云つた。
「本統に今日は寢すぎちやつて御免なさいよ」
美知子は大急ぎで袴を着けながら云つた。
「いゝえ、それは構はないのよ、餘りよくおよつてらしたから、日曜ではあるしお起しゝなかつたの、だから早く髮でも御結ひなさいよ」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と云ひつゝ、白い前掛の人は出て行つた。

美知子が母と一緒に寄宿舎を出たのはそれから三十分の後だつた。途中も餘り口は利かなかつた。母は唯姉が家出をした事と、直に其の夜の汽車で東京に來たのだと云ふ事だけを話した。美知子は母の云ふ事を驚た振りもせずに聞いて居た。

行く先きは勿論大塚の伯母の家だつた。

「おみつちやんが來たよう母さん」

六つになる從妹が、何が嬉しいのかとびはねて居る。

「姉さんよく早く歸られてね、さあおみつちやんもおあがりよ」

伯母は前掛で手を拭きながら、入口の三和土に立つてる美知子の小さな包を受取つた。

何時もの居間に通ると朝飯最中で食卓が一杯になつて居たので、ヤットと火鉢のわきに坐つた。人はいゝが、愛想のない伯父は默つて食事を續けて居る。四人の從姉妹も、まだ髮も亂れたまんま、着物も着かへずに居る。

「おみつちやんはまだ御飯前でせう、何もないけれどお召がんなさいな」

一番上のお濱が立つて行つてお茶碗とお箸を待つて來た。

「私もう澤山、欲しくないから」

美知子は斯う云つて、食卓をはなれた伯父のあとに從いて座敷の六疊に行つた、伯父は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

楊子をつかひながら始めて何でもない事を一言二言云つてまた默つてしまつた。
美知子は今日の國民を取り上げて讀み始めた。その内に母も伯母も御飯が濟んだと見えて煙草入を持つて這入つて來た。お濱は三人の妹に何か云ひながら跡片づけを始めたらしく流しもとに洗物の音がしだした。
一座がしらけ渡つて銘々に誰が何を云ひ出すかと待つて居た、暫くして母が、
「お前姉さんの居所を知つて居るんだらうね」
と云つた。
美知子は母達が知つて居る者ときめて居るからこそ斯う早く迎へにも來たものだらうと思つて居たが、全く豫期して居た通りに出られた事は、おかしい樣にも思つた。それで今更らしく隱し立てしてしてもどうもならないと思つて、
「えゝ知つてます」
と云つた。
「それぢや逢つたかい」
母は突込む樣に云つた、が直がに逢つたとは云へない、かと云つて皆の見當つけて居る所もわかりきつた所だから、東京でないとも云へず、
「今日逢はうと思つて居た處でした」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と努めてハッキリ答へた。

「それぢやみつちやん、逢つてどう計らうと思つてるの」

これは伯母であつた。

「逢つて話して見た上でないぢや解らないぢやありませんか伯母さん」

美知子は母親の思はくの方が先きに聞き度いので、姉の事に就いては一切こちらから口は開くまいと覺悟した。

「それよりお母さんはどうしやうと思つてらつしやるんですか」

少しうろたへ氣味で反問的に斯う尋ねた。

「勿論伴れて歸るのさ」

今迄新聞に目をおとして居た伯母が、一寸顏を擧げて斯う云つた。

「だつてそんな事したつて駄目ですよ、伴れて歸つた處でまさか絆いでも置かれないぢやありませんか、また絆ぐ樣な事するのは餘り殘酷ですね」

餘り皆がそらぐしく見たので、遂に斯う云つてしまひはしたものゝ、多少云ひすぎたと思つた。

「お前またさうお云ひだけれど、折角えゝ樣に取り計らつてやるのに、跡足で砂の樣な事をされるんだもの、親の心子知らずと云ふが本統さ、それぢや絆ぐ樣にもしやうぢやない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か、第一外聞が悪くて居られる事ぢやない」

母はどいつもこいつも、と云ひたいのを我慢してこれだけ云つた、美知子には、其の母のいと、えとを間違へる訛りの多い、詞がいやに耳に立つた。

「だけど世間の見えに育てゝる事ぢやないでせうだから、姉さんの幸福になる様に計らつたがいゝんだと思ひますわ」

美知子は理屈云つたつて駄目な事は知つて居る。それから幸福と云ふ意味だつて、自分の云つてる通りには解されない事も知つて居るが、何故か斯う云はねば氣が濟まぬ様に思はれた。

「誰が姉さんの不爲のなる様にしてるもんか、お前は姉さんの事となると内の者を目の敵にしる」

美知子は兩親始め姉妹に迄、自分が姉を煽動してでも居る様に思はれて居る事を知つて居る。時には連累者の様な取扱ひを受けた事もあつた、現に近來は美知子からの手紙は姉の手に渡る前に父母の眼を通つて取捨されて居る事も知つて居る。けれ共美知子自身は自分の判斷が決して偏見に陷つて居るものではない事を信じて疑はない、從つてさう云ふ内の人達に對しては、思ふまゝに任せて、殊更に辯解をしやうとは思ひもしなければ現在しても居ない、それで今自分がオビキ出してもした様に云はれた時、昨夜の自分の態度を説

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明したい樣な氣もしたが、それも甲斐ない事と思つて口を緘じた。

「お母さんも大抵な心配ぢやないから出來る事なら穩當に歸つてもらひ度いんだかね」

すべての成行を默つて見てると云つた態度に構へて居た伯父は、話の第二の緒に斯ういつた。

「こちらのお濱さんなんぞは本統に大人しくて、女らしくて親孝行者だよ、何時來て見ても從姉妹同志で斯うも違うものかと思はない事はないんだよ」

母はしみ〴〵と斯う云つが、煙管の火皿を火箸でほじくり始めた、美知子は、一週間に一度神田まで電車で髮結にゆかれるといふ事にすべての滿足を買ひえてるお濱さんを、またないもの〻樣に羨やましがる母が氣の毒にも思へた、それて「皆がさう〳〵お濱さんの樣な型に出來上つてたまるものか」といふ氣もした。

「姉さんそんな事があるもんですか、みつちやんなんぞ人に出來ない學問が身について居るんだから」

伯母は打消す樣にかう云つたまた例の「お豪らう御座いますから」が出たなとは思ひながらも、端書一本滿足にはかけない自分を學校に行つてる時間の上から打算して豪いものと計り思ひ込んで居る伯母の正直さに對して、美知子は、知らず知らずに欺いてる樣な氣がした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とにかく民ちやんの處を聞いといたらいゝでせう」
伯父は結末を急ぐらしい口調で云つた。
「さうですね、こちらには國の父さんの考へもあるんですから。そしたら矢張り何だらうね、速見さんと一緒で……」
母は云ひにくく相にして斯う尋ねた。美知子は皆が皆、かうと計りきめこんで居るのを憎らしく思つた、それよりも斯る事を知りぬいて居て、それで速見の處になんて身を潜めて居る姉が歯痒くてならなかつた。
美知子は此の際寧ろ内の人の所謂煽動者であつて、一圖に姉を庇い度い氣になるかそれとも皆の云ふ處を尤として姉を伴れ返す事に盡力する氣でも起つたなら却つて苦痛は少いだらうと思つた。が勿論さうしたい意志はないので一時のがれに、
「そんな事知るもんですか、まだ逢つて見ないんぢやありませんか」
と已むを得ず前に云つた事と辻褄を合はせた。
「それならそれでいゝよ、その代り姉さんが居る處だけをきいときませう」
美知子は「その代り」といふのがいやだつた。
「云はなくつても、どなたか入らつしやる時に私が御一緒に行く事としませう」
強ち姉のために斯う云つたのではないが、何だか一人でも多くの人に告げる事は、自分

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自身の輕はづみを示す様に思へたので云つたまでゝある。そしたら自分の同行を拒むだらうと思つた母が案外にも「それならそれでもいゝ」と云つたので一寸あてが外れた様な氣がした。

「それぢやチツトでも早い方がいゝだらうから、今からでも出かけたらどうですか」

いつもセツカチなのは伯父である。

「あゝ、それぢやさうしませう。美知、伯父さんもあゝ被仰るんだから、お前が云つた通り一緒に行きませう」

母ははや煙草入れを帶の間に入れて立ち上りかけた。美知子は今更行かぬとも云はれない。トツサの間に「どうなりとなれ」と投げ出した様な氣になつて立ち上つた。

「何れにしてもそれがいゝでせう、そしたら姉さん成るべく氣を永く持つてね」

伯母は氣づかはしさうに斯う云ひつゝ後からついて來た。

降り様とした時、下駄が二足チヤンと向ふむきに並べてあつた、お濱も赤い糸のつながつた針を袷にさしながら出て來て、

「それぢやおばさんお早く、みッちやんも今晩は内に來ていゝんでせう」

と追ひすがる様にして云つた。

二人は通りに出た。此の時迄美知子は、姉の宿に行かうと云ふ事にも、姉を伴れ出して

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何處かで逢ふ様にしやうかと云ふ事にも、ハッキリきめては居なかつた、只母に伴れられる様にして、電車のある方へ歩いて行つた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

沈黙

ポ

山々の頂は交睫めり、谷も、洞も、巖も靜なり。 ——アルクマン——

悪魔我が頭上に手を置きて、

聞けよ、我が云ふリビアの土地を、Zaire 河に近きリビアの胡地を。其處には靜寂もなし、沈黙もなし。

河の流れは鬱金色に病み、滔々と海に注がで、太陽の赤き光の下に、喧しく、戰きつつ永年に渦巻く。

河の兩岸、沼地數里に亘りて、見上ぐる許り生ひ延びし、物凄き睡蓮の荒野あり。此靜寂の中、睡蓮は互みに太息吐きつつ蒼白き頸長く伸ばして、フワノ＼と、無限の空に搖ぐなり。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

地底に騷ぐ水音か、何處よりともなく、朧なる囁き、睡蓮の間に漂ひ來ぬ。睡蓮は倘も互みに太息を洩す。

暗く、怖しき雲を摩する密林は、睡蓮の荒野に續きて境せり。ヘブライデスの島々の岸打つ波のそれの如、低き密林の葉は、小止みなく動けど、空に一陣の風あらず。而も神代ながらの大樹の梢は、高鳴りして裂くが如し。滴々と太初の露零れ落つ。根下には怪しき毒草數も知られず、亂れし糸に夢を結ぶ。仰げば灰色の雲、永久に喧しき音立てゝ、西へ西へと流れ行き、遂に、地平線なる火の障壁に大なる瀧津瀬を懸くるなり。されど空に一陣の風あらず、而も Zaïre の河邊靜寂もなし、沈默もなし。

時は夜なりき、雨降る夜なりき。雨と注げど、降り來しは血潮なりき。我は丈高き睡蓮の間、沼地に佇みぬ。雨は我が頭上に注げり。靜寂の氣迫る中、睡蓮は倘、互みに太息ぞ交はせる。

忽ちにして血色の月、蒼白き薄霧の中に上り來ぬ。我が眸は、河の岸邊、月に照されたる灰色の巨巖の上にあり。巖は灰色にして、物凄く、丈また高し。其面には刻まれし文字あり。或は睡蓮の沼を分け、文字を讀み得る邊りにと近附きぬ。されど倘文字は讀み得ざりき。再び我沼地に歸らんとする其刹那、月光輝きを増しぬ。あはれ我、今顧みて巖と文字をと凝視するなり。……文字は「荒涼」とこそ月影に讀まれたれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼を擧げて空を見しに、巖の頂に人ひとり彳めり。其人の爲さん樣を見んものと我は睡蓮の蔭に身をひそめつ。彼丈高く姿勝れたり。身に古羅馬の長衣を纒ふ。顏の輪廓定かに認め難きも、そは慥に神の姿のそれなり。夜の黑き幕、霧、月、露皆其被服もて彼が面をば包まざるなり。其額想ひに高く、其眸憂愁に荒れ果てゝ、双頰の上刻まれし數條の皺に悲哀、疲勞、人類を憎む呪ひ、孤獨を願ふ心の色、それ〴〵明らかに讀まれぬ。

彼、巖上に座し、手もて頭を支え、荒涼の野を回顧し、騷がしき密林の藪を瞰下し居たりしが、忽ち高き太古の森を仰ぎ、更に又高き無邊の空を打眺め、遂に血色の月を熟々と見入りぬ。我は睡蓮の蔭に隱れて、一向、彼が爲さん樣のみぞ打守り居たる。

彼は荒涼孤獨の裡に震ひ慄けり。されど、夜は次第に更け行きぬ。人尙、巖上に座せり。彼、眼を空より放ち、荒涼たる Zaire の河上、黃に濁りし水の上、睡蓮花咲く荒野の上、其間より起る囁きの上に思ひを廻らせり。

我は隱れて、只、彼の爲さん樣をぞ打守る。彼は寂寥の裡に震ひ慄けり。されど、夜は更けぬ。人、巖上に座せり。

斯くて我は沼地の凹所に下り立ち、目も遙なる睡蓮の曠野を徒渉り、河馬を呼びぬ、河馬は其處に住めり。我が呼ぶを聞きて、べへモスてふ巨獸つれて、巖が根近く來る。月の下、巨獸の嘶き、怖ろしく、無邊際の天地に轟き渡りぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我は睡蓮の蔭に身を寄せて、彼の為さん樣をぞ打守る。

彼は寂寥に震ひ慄けり。されど、夜は次第に更けぬ。人巖上に座せり。

こゝに我れ、騒擾の呪咀もて、天地六合を呪ひしに、穏かなりし大千世界、忽ち恐る可き颶風の巷と變じぬ。やがて見る、一天掻き曇り、篠突く大雨烈しく彼が頭上に降り注ぐ。河水氾濫し、泡沫湧き返り、睡蓮、沼に呻吟く。密林は風前に折れ碎け、電光閃いて、雷鳴頻りなり。巨巖さへ今は根より搖ぎぬ。

我は尙も睡蓮の蔭に横はり、彼が為さん樣をぞ打守る。

彼は寂寥に震ひ慄けり。されど尙、夜は次第に更け行きぬ。人、巖上に座せり。

憤怒の我れ、此時、沈默の呪咀もて、河、睡蓮、風、森、天空、雷鳴、睡蓮の太息とを呪ひぬ。忽ち之等總てのもの、深き沈默に入りぬ。月は天空に冲する步みを止め、雷鳴靜まり、電光閃きを收め、雲不動の姿となり、氾濫の河水又舊に復す。密林も搖ぎを休め、睡蓮も太息を殺し、彼の怪しき囁きも、最早其蔭に響かずなりぬ。否、目も遙かなる曠野の裡、果はものゝ音の響くを聞かずなりぬ。

此時、我れ、再び巖上の文字を見上げしに、不思議なり、文字は既に變りて「沈默」とあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り。我又視線を彼人の上に投げぬ。其面貌恐怖に滿てり。

やがて彼、慌しく頭を擡げ、巖上にきつと立上つて虚空に耳似けぬ。されど無涯の曠野は物の音絶へてなし。唯巖上の文字「沈默」とのみ。

身を震はせつゝ、面を背けたる彼は、遠く遠く逃れ行きて、遂に再び見えず。

預言者(アラビヤ)の書、固く閉ぢられたる預言者の書には、多くの怪しき物語潜めり、天と、地と、海との栄ある物語、或は海と、天と地とを支配せるゼニーの物語など含めり。又巫女の語りしものにも多くの教へを含む。又昔ドドの地、神秘に戰く木の葉に依りて聖なるこの數々は語られしとぞ。

あはれ、今惡魔が墓石の影、我が傍に座して語りし此比喩は、最怪異なるもの丶一なり。惡魔は是を語り終らし時笑ひつゝ墓穴に入りぬ。されど我れ、惡魔と共に笑ふを得ざりき。我れ笑はざりしが爲、彼憤りて、我を咒ひぬ。永久(とこしへ)に墓に住むてふ山猫は、其時墓より出て丶惡魔の足下に横はり其面貌をしけじけと凝視せり。

——(完)——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋海棠

白雨

筆持てば物書かんとや秋海棠
指に巻きて捨る脱毛も秋の雨
がてんして茶に燒く舌も新酒醉
秋扇で一茶が膝の拍子など
汐干狩アラ藻の上を這ふたこや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

若竹や産子を知らぬ旅の父

秋晴や鳩の脚に似し蕎麥の莖

秋風や小男腕を撫てゝ見る

破芭蕉寺の横壁古代文字

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダ、ガブラア合評

H　と　Y

漠然と唯、合評々々と振れ廻つた處で雲を掴むやうな話ですから假に斷う不完全ながら題を設けて見ました。

（T記）

處女時代のヘッタ

ヘッダには如何考へても阿母さんが無かつたやうに思はれます。若し有つたとするなら阿母さん等は余り眼中に置かない類だつたでせう、ガブラア將軍が唯一人の愛娘、花に喩へたら一輪咲きの牡丹！

將軍の家には隨分若い男達も出入したらしいやうですし、ヘッダは其等の男の視線を集めて、舞踏會の、夜會のと派手な華々しい甘い空氣に圍繞せられて得意な夢ばかり見て居たことでせう　まあ二十五位迄も無反省な時代て女王のやうに暴君のやうに人に對して振舞つて居られたのかも知れません、彼様なら

余りに色彩の豐富な、外界の刺戟の多い、退屈のないヘッダの處女時代の境遇を私はむしろヘッダの爲に悲しみます、何故ならヘッダは眞面目に物を考へると云ふ大切な習慣を養ふことが出來ませんでしたから。

此境遇と美貌と怜悧と機智などが一緒(ひとつ)になつて彼女を遂々人間にさせずに了(しま)つたのぢやないかとまで思はれることさへあります。

將軍の家に出入した男子の中でともかくレエボルグは一番ヘッダの心を惹いたものでせう、凡俗な社會に反抗し自己を獨立させた自由の勇者のやうにも、又偉大な天分のある人のやうにもヘッダは思つて居たらしいが、實際はもう唯、デカダン氣質一方で、それには多少才能の秀でた點も有つたにせよ、全然精神の統一を失つた、徹頭徹尾不眞面目な、浮薄な、柔弱な、男子の意氣地がないどころか一個の人格として到底も相手にされぬやうな男としか思はれない、其癖世間的の名聲心や、虚榮心には可い加減ヤキモキする、何だか卑しい、嫌な、氣持のならぬキザな男子のやうぢやありませんか

彼淺ペラな性格では定めし、すぐヘッダに戀を語つたことでせう、不眞面目な愛な　併し二人が相互に戀に溺れたとはどうしても思はれません、

併しヘッダはレエボルグが自分を愛して居ると云ふ自覺に伴ふ快感は確かに有つて居たに違ひ有りません。縱ひ彼自身を愛して居なかつたにせよ、ヘッダのやうな、戀

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に對し、男に對し、好奇心と遊戯衝動の多い、そして或意味で空想的な女に取つては戀の相手にはレエボルグのやうな人が面白かつたのでせう、ヘッダの興味の的となるには或は格好な男かも知れません。レエボルグの前で戀人らしい振舞をする事はヘッダの自尊心が許さなかつたのでせう、併し彼に對して萬更氣が無くも無かつた（結婚を意味するのぢや有りません）ことは處々でそれと察しられぬこともありません。此種の女は縱ひ心の奥底には熱烈な愛が有つても夫が其儘形には顯れて來ないのでせう。自分自身も意識して居なかつたのかも知れない。彼女は彼が自分に愛を求めるのを厭と思つたり、煩く思つたりするやうな女ではなく、內實非常に小供らしいと云つたやうな初心な嬉しさが湧き立つと同時に又侮辱されたやうな氣もし、一も二もなく愛を否定する事に只々云ふに云はれぬ快感を見出したのでせう。斯う云ふと長たらしいが此心理は彼女の中で餘りに迅速に働いたので、恐らく自身には其瞬間何等の意識的理由も無かつたらしう御座いますが。

愛に就て考へて見たり、愛に就て不安を抱いたりする程處女時代のヘッダは反省的な人間でもなく、又其程神經の尖つた女でもなかつたやうですね。

愛の否定の快感はヘッダも容易に捨られなかつたでせう、是がレエボルグとの關係を可成の間持續させ、又彼女が彼に對して全然冷淡でなかつたと云ふ證據を意味して居るのではないでせうか。

さうさう、二人が後に此當時を追想してこんな事を話し合つて居ましたつけ。

ヘッダ「貴方ねエ、私熟々あの時分の事を考へて見ると云ふに云はれない面白い――思ひ出してもぞつとする程な快樂が有りましたつけねえ、――ほら、他人にや到底も考へも付かない二人の間の秘密に付いちやねえ。」

レエボルグ「何も彼も曝露てお話しましたつけねえ其時分には世間で些とも知らなかつた僕の秘密をなあ――ちつとも隱さず僕の不行狀を――毎日毎晩、放蕩をした顚末をね、あゝ貴女は何でまあ、恐ろしい魔力を持つて居たんです――僕に全然白狀させて了ふなんて――」

そしてレエボルグが彼樣な具合に交際した二人の間には愛情なんてものは全く無かつたのかと訊ねると、ヘッダはなかつたと斷言して居ますね、ぢや如何して彼樣な秘密を聞きたかつたのですと訊ねると、

「貴方、分らないの？　まあ彼年の若い娘がねえ――若し――秘密に聞く事が出來るなら――世間の――到底も書物や、何かで解らない事を、人にも聞けないし、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

又聞いては悪い事を……」

其を聞きたい、索りたいと云ふ好奇心、夫が一の理由だと云ふやうな事を幾何か言葉を濁して云つて居ますね。此様な事も確かに二人を接近させた原因の一つでもありませう、けれど私は何だか余り詮索に過ぎるか知れませんけれど、レエボルグに其秘密を話させた他の主な理由て、彼女自身口に出しては云へなかつた事は、崇高な事、神々しい事、華々しい事の好きなヘッダから見ては實に醜いとも、恥づ可き事の極とも思つて卑しめもし、心から憎みもして居る墮落、其墮落の顛末を得意らしく男自身の唇に上せさせて、無意識に其自尊心を自ら傷けさせ、自分で自分を侮辱させて、ヘッダは心竊に快感を貪つたのではないでせうか。ヘッダに取つては其様な放蕩の話などは聞く丈けも忌はしい事だつたに相違ありません。けれども其快感の爲にはまづ自分を辱める事を敢てしたのでせう。私は後に彼女が妻となつてから夫テスマンを輕蔑して、唇に浮ぶ皮肉な冷笑を押えて、貴君を愛する余り、貴君を安全に文明史の教授にしてあげる爲に其敵手の原稿を燒いたのだと大嘘を吐いたり、懐妊の苦痛を訴へたりして、夢中に喜ぶ夫を心からさげすみ、其弱點を見事に突差したのを痛快に感じた女としてさうありさうに思はれてなりません。

二人の仲が愈々本物になりさうになつた時、ヘッダは無論強硬に食ひ止め、それに答ふるにガブラー將軍のピストルをもつてしましたね、あの瞬間がヘッダの戀愛否定の最高潮に達した時で、ヘッダが心中の戀の滿足と、弱性からでなくては得られぬ快感中の快感に魂は躍つたでせう。戀の否定が詰り彼女の戀なのですものね。レエボルグを殺さうと云ふ氣はもとより無かつたのでせう。其程彼女の性格は眞面目でもなければ正直でもないやうです。又殺す必要もありますまい、あゝした場合にヒストルで相手を狙つてやると云ふだけの行爲て、既に彼女自身内心の希望は完成したと云つてもよいのぢやありますまいか。其瞬間の快感丈けていゝのでせうよ。銃殺するよりも何だか惡く殘忍ですね、ヘッダはまだ〳〵レエボルグに興味を繋いで居るやうです。どこかでこんなことを云つてたぢや有りませんか。

「私が疑つて仕舞はなかつたと云ふのはね、何も彼晩私が馬鹿に臆病だつた故ぢやなかつたのです。」なんて、まさかにヘッダだからつて箍の緩んだ男にでゞもなければやあんな間抜けた眞似はしなかつたでせう。

（H）

ヘッダはガブラア將軍の令嬢として先づ高貴の部類の

家に人と成つたのでありませう。華美と、我儘と、自由とに狎れきつた心にも自ら備はる貴族的品位は、彼女に中庸と自制力とを授け、物に動ぜぬ心を養はしめたものと思はれます。彼女が根據なき感情的な美の憧憬者であると共に中々自尊心も强かつたやうです。彼女の崇拜する美は同時に彼女の信仰であつて、實に最期迄の行動を支配して居ました。彼女の自尊心は決して修養と努力とによつて得られたものではないし又彼女の學識は彼女をして自立自營せしむるの信念を抱かしむる迄には餘り微弱でありました。彼女は彼女自身の行爲及内的生活を統一するだけの確實なる根據ある信仰は持つて居りませんでした。彼女は父の家、即我家に於て一青年レエボルグに會ひ、結婚以前に於て既に邪惡の快樂を味はつた以來、毎日彼を我家に待つて相愛の思ひを繰りました。然し男は此時既に純白なる青年では有りませんでした。所謂男子としての或經驗も經、そして其をヘツダに打開けました、ヘツダの方は無垢なる少女の好奇心から大膽にも其秘密を發かせ、何の臆面もなく夫を聞き取りました。レエボルグは此ヘツダの態度に醉つて了つて、まさかに自分が捨てられやうとは自覺して居なかつたでせう。然し女は失望させました。

ヘツダは精神力の盛な才氣に滿ちた天才肌のレエボルグを愛したとは云へ、彼の自制のない、醜惡な罪惡的分子の多い陋劣な性情をどうしても許す事が出來なかつたのです、美が承知しないので、一時は興味を感じて心は寄せたが結婚しようと云ふ氣にはどうしてもなれなかつたらしう御座います。と云ふのは彼女の性質が熱情的で有つたゞけ狹量で、人を容れるとか憫むとか云ふ事が點から出來ない處へもつて來て、レエボルグに對する愛の觀念が大に眞面目を欠いて居たからでせうと思ひます。ですから勢ひレエボルグによつて自尊心の滿足を得る事が出來ない、斯う感じたヘツダは怜悧?にも手早くピストルの引導を渡して爪先さへよごさずに見事男から身を引きました。之も一つには彼女が凡て意識的であり、冷靜であつたからでありませうが其時のヘツダとしてはそれより外にとる道がなかつたのでほんの自然的發作の行爲であつたかも知れません。

ヘツタは何故結婚したらう　（Y）

先づ最初に結婚前の心理狀態を調べて見ればなりますまい。それはブラックに云つて言葉の中に能く顯はれて居ると思ひます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「詰り私は踊り疲れて仕舞つたと同し事よ。私の時代はもう過ぎ去つたのです。――全く過ぎ去つて仕舞つた譯でもないけれど――まあ、其様なやうなものですね。」

ブラック「さう、自分から好んで老い込まなくてもいゝぢやないか。」と云つて居る處があるでせう。

年齢から老へても廿九、もう娘盛りは過ぎて居ます。外面に向つてのみ生きて居た、はしやいだ、無反省な生活にも漸く飽いて、ものとはなしの空虚を感じ出して來たのでせう。興味と好奇心の對象物の日に日に少なくなつて行くのも物寂しかつたのでせう。若し彼女が何か專門的に研究す可き或物をもつて居たならば、又は天職と信じられるやうな事業にても身を投じて居たならば、或は確實な自己の宗教觀念でも有つて居たのだつたらそんな事はなかつたでせうが……。けれどヘッダには何にも有りませんでした。只散慢な生活、注意の集中點のない生活です。退屈、疲勞、失望、等が襲つて來るのは必然でせう。如何しても自分の生活を一變せねばならなくなつて居たのです。何處かに落付處を見出さねばならなくなつて居たのです。こゝて初めてヘッダも眞面目に自分を考へ、自分を知り究めたのだつたら、眞に自覺ある女として生れ出る事も出來るのだつたでせうに。自己の獨立と云ひ、自由と云ふのもこれからだつたのでせうに、

ヘッダは何處迄も女らしい女でした。女の中の女、實に弱い女でした。根本的に考へる丈の堅實な心根を有つて居なかたのです。如何も小怜悧で不可ませんね。まやかし上手で。あの可成に強い力と意志と情熱とを有ちながら、それを何物に向つて集中すべきかの標的を見出す丈の眞の知識を缺いて居るのです。と云ふのはそれを飽迄も見出さうとする丈自己の生活に對する熱心と忠實とがないのです。

そして遂々不解決の解決とも云ふべき捨鉢的な結婚に其落着所を定めて仕舞つたのです。全くブラックに白狀して居る通り嘘から出た眞實だつたのでせう。テスマンが何だか憂鬱いて居るのを見て、妙に可哀想になつてふと口を滑らしたなんて如何にも自意識の強い女に有りさうな弱點ですね。そして嘘から出た眞實の成行に身を任せて見す見す生涯を破るなんて、此無頓着さ加減は到底達人の無頓着ではない、つまり、自己の嫌厭と疲勞と絶望から來た自暴自棄でせう。

處が併しヘッダはテスマシに對して、小娘らしい、隨分お目出度い希望と信頼の念を多少有つて居たやうですね。ブラックに話した處などから推して考へて見ると、例へば何處から見ても別に是ぞと云ふ點の打處もない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の、勉强家だから其内に屹度少しは世間に知られるやうになれやうと思つて居るとか、私に色々な事を云つて與れた人は澤山あつたけれど、さう迄眞實に、親切に思つて與れた人はなかつたからとか、大分惚氣を云つて居ましたつけねえ。レエボルグを自ら捨てたり、自分の生活に屈托したりして內實は余程氣が脆くなつて居たかも知れません、此樣な恍けたやうな事を考へたとすれば。

ヘッダは結婚するに當つてレエボルグの事を明に心に浮べたに相違ないと思ひます。そしてテスマンとの結婚が彼女の心に何物を齎すかをも考へて見たでせうね。そつと胸の裡で二人を比較して見もしたでせうよ。

此パッショネートな、貴族的な女の心に宿つたあの戀は、戀の虐殺に寄つて成就するより外にないあの戀に報ゆるに他人との結婚を以てする事は此時の彼女には責めてもの快よさであつたかも知れません。レエボルグに對する感情がテスマンとの結婚を多少助けたやうでも有りますね。それには好人物の學究先生はもつてこいの代物だつたでせう。

此樣な結婚は不幸を產むに極つて居ます。テスマンを得てヘッダは增々寂しさを感じたのです。夫はもとより、其伯母さんも枯草臭い家迄も皆厭て々々ならなくなつたのです。テスマン家の何から何まで自分と趣味が合はないのですね。不愉快、不滿足、寂寥、屈托、疲勞、彼女は唯々焦れて苛々して、すねて、ねぢけて行つたのは無理もないと云ひ條、どうもヘッダ自身に罪が有るやうです。事々に細君から輕侮されるテスマンこそいゝ面の皮ですね、テスマンは或は無能かも知れないが、好人物丈、愛嬌もあり、何處から如何見ても惰氣のない男丈け余計見じめな氣がします、若い女に持てさうな面白味と云つてはないかも知れないが、仇氣ないやうな、通常、若い男子に有り勝な、キザな、鼻持のならぬ厭味が無い丈でも私は、尊敬すると云ふ氣にはなれないが寧ろ愛して遣りたい位に思はれます。此樣な人には世間の事は何も知らせずに、細君の御機嫌取りになど心を腐らせず、只一心に文明史の研究丈をさせて置いて遣りたいと思ひます。

如何に、明けても暮れても文明史の學校屋の妻の平坦な、波瀾のない生活の淋しさ、退屈さ、詰らなさに堪へ兼ねた余りとは云へ、此テスマンを政治家にしたらの、ヤレ大臣になつたらのと、慫慂し切つて居ながら、其輕蔑して居る夫に對して尙此樣な事を求めたり、華美な社交場裡を夢みたり、貧乏世帶を苦にしたりして居るあたりは、冗談でないとすれば、淺墓とも、無智とも、寧ろ滑稽て馬鹿氣切つた話です。どんな無教育な女だつて、此樣な時、此位な卑屈な考は起せませう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘッダは何故かう人にばかり求めて、自分自身に求めないのでせう。自分を如何かしやうとか、救はうとかの方面には少しも努力して居ません。彼女の取る可き道は斷然テスマン家を出て獨立するか、でなければテスマン家に同化するか、さもなければ、今より一層孤立して全然、自己自身の中に充實を求めて、周圍に向つては少しも注意を拂はないと云ふ無頓着な純然たる超然的態度を取つて、テスマン家に何物をも與へぬかはり、何物を望まぬと云ふ深い覺悟を固めて掛らねばなりますまい、そして夫や伯母様が困つて離婚を申込めばいつ何時でも默言つて承知して出て行くと云ふ此三途位なものでせう。

然しヘッダは離婚と云ふ様な事は甚く恐れて居ました此様な處は餘程臆病だつたやうです。コンベンショナルな道徳を顧慮する事や、自分の實力のない事や、例の詰らぬ虚榮心なども多少手傳つて居たのでせう。それにしてもブラックに云つてる「自分の仕事は此世中に唯一つしかない。それは一日、一日と自分の命を縮めて行く事だ」と、此言葉が彼女自身の眞實の聲ならば、自分の救濟だとか、満足だとか云ふ様な仇な希望を思ひ斷つて仕舞ふ程もう絶望して居るのなら、それ程人に對し、又自分に對し嫌惡の念が强いなら强い丈何故もつと眞面目に突込んで根本的に如何に生く可きかを考へなかつたのでせう。どうも私は物足らなくて仕方が有りません。其故か總てが嘘らしくて少し馬鹿々々しいやうな感じさへします。イプセンも餘り拵へ過ぎはしないでせうか。併しこゝら邊りがまあヘッダの徹頭徹尾女性で有つた事と獨存の人たる資格、即ち男氣と知慮とがない弱點を皮肉に示した處なのでせう。どうかすると頭を擡げかけるあの小才氣は齒の浮く程厭味ではありませんか。

(H)

私は大體に於てメレヂコフスキーと同感です。結婚は必らずしも幸福を呼ぶものでは有りません。平凡にして幸福なる結婚のみ平和なるものであります。人として自己絶對の自由を呼ぶ者は多くの場合に於て結婚は最後の墓地だと覺悟せねばなりません。歷史的社會的の因習は問はずもあれ、結婚なるものは本能の慾求と自立自營の出來ぬ依賴心の强い、孤獨の寂寞に堪へぬ人逹が社會の困憊と疲勞に敗北して、自己の安全と、平和とを求めん爲の最都合よき避難所、逃げ込み所としてもぐり込む穴ではありますまいか。ヘッダに於ても等しくさうでありました。彼女は獨立して行かなければならぬ程の身分でも境遇でもなかつた許りではない、彼女は美の信仰の爲

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に、自由の爲に獨立して天地の廣き道を歩む丈の意志の強い信仰のある人ではなかつたやうに思はれます。

云ふ迄もなくあの才氣と美貌とが徒らに彼女を誘惑の巷にさまよはせて、自らに求め自らを尋ぬる信仰的概念を鈍らしめたのです。

結婚に伴ふ約束の束縛、不便の多かる可きを慮らずして愚かにも彼女は只一回の安逸と內心の空虛を滿さんが爲に結婚して仕舞ひました。此不自全なる偶然の結婚が不幸に陷らぬ譯は有りません。意識的に現世に絕望し困憊した彼女は生のかぎりのない迄に其心は冷酷となり、憎惡となり、捨鉢となり無慾望となりました。自ら自らの心を憎み呪ふ程のヘッダに如何してレエボルグなどゝ……あの多角形は男と結婚する事が出來ませう。平凡とは云へ、眞實で賴母し氣のある、確かな、先づ安心して身を任せるに足る好人物のテスマンに落ちて行くのは寧ろ當然でせう。如何にも普通あり打な婦人の撰びさうな結婚法です。彼女は自分の生涯を擲げて此お目出度い大丈夫らしいテスマンに走つたのは其依賴心の強い敗滅の淚が遂に傲慢なる自尊心を曇らせたからでありませう。

結婚前普通の女が抱く夢へのやうに、幾分か都合のよい算用をたてゝ、希望を豫想して居たヘッダは其後事一々に付けて絕望の度を高め、果てはいらいらする餘りに凡庸なる夫を無遠慮に最後迄嘲笑し輕蔑しました。彼女の心は輕蔑もなり、嘲蔑となり、罪惡的となり大膽となり、虛僞となり自暴自棄となりました。

遂に結婚は彼女の美を絕滅と敗亡とに終らしめました。テスマンの家にレエボルグと會つた時も化石して居た彼女の心には何等の情も動きませんでした。もはや昔のヘッダではなく、自ら自らに厭き人生を咒つて居るヘッダで有りました。此時彼女の眼中人情のほめきなく、愛なく熱なく同情も淚もない、冷灰の女と化して居たので寧ろ人の運命を支配して一向其れの破滅を見る事のみを樂し運で居たのでした。之が云ふ可からざる快感を彼女に與ふる迄に彼女の良心は荒廢し痲痺して居たのでした。そして惡の爲に惡を喜ぶ破壞的狀態に其心は一變した。彼女の銳き理智は惡賢く働いて憐む可き從順なテーアをさいなみ、唯一の情を傾けし愛人レエボルグを殺し、又遂に自らを殺した。詰り自分の輕はづみからワナに陷入つた事を氣付くと同時に生存の苦痛と重荷に堪へられなくなつたのでした。で最後の自由を保つ爲に美を實現する爲に彼女は理想的美の死を遂げたのであります。併し彼女は此死によつて幾何か人間らしく生きる事が出來たので、彼女は實に死によつて失敗の生涯の幾分を取返し得たと云つてもよいでせう。花輪で飾られた若い女の死體

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

勝利の死と云ふのでせうか。けれども何だか臆病のやうにも思はれますれえ、法庭に召喚されてピストルを渡したゞ逃一を告白する氣力を失つて了つて居たのです。ヘッダの身になつて見たらもう此上の生きやうはなかつたのでせう。

（Y）

家庭の常客としてのブラック

ブラックは隨分世間通な、融通の利く、惡く世の中を呑み込んだ、どこ迄も常識的な處世上の老手です。拔目のない、それ丈安心して交際の出來ぬ男のやうです。全體に行き亘つた調子の低い感じのする卑しい厭な男ですね。

兎も角、テスマン夫婦の歡心を得、殊に主人テスマンの信用に取り入り、テスマン家にとつてはなくてならぬお客樣とまでなつて居たやうですね、客と云ふよりは寧ろ家人とでも云ひたい位に。

あの三角同盟を主唱する邊り、如何にもブラックの人と成りが偲ばれて居ます。

隨分此若夫婦はブラックからお坊ちやんとも、お孃さんとも見られて居たのでせう。又ブラックはヘッダの心を得る爲には可成努めて居たらしいやうです。ヘッダはテスマンに對するよりも寧ろブラックの方ないゝ友達とも、話相手ともして却つて何事も憚りなく打明け話もすれば相談もすると云ふ風で、自分の屈托を紛らす爲に何時もブラックを使つて居ます。ヘッダの爲には氣散じと憂さ晴しの此上ない重寶者であつたのでせう。併しどうもヘッダが卑しく見えてなりませんブラックに對するあの態度を見ても同じ玩具にするにせよ飜弄するにせよ。

（H）

ブラックは彼自身が自白して居る如く、ヘッダを掌中の玉とせん目的の下に彼の家に根よくお百度を踏んだのでせう。ヘッダに媚び、テスマンのお髯の塵を拂ひ、斯の類の青蠅は唯にブラックのみではありません。慾ではく程そんじよそこらにころがつてる連中の比類でありませう。

（Y）

レエボルグとの再會

レエボルグと舊い學校友達で有つたテーアとが市に來てテスマン家を訪れた事はヘッダに取ては大事件でした。彼女の性格は此大事件に相遇して目覺しくも發展し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのですから。

テーアを巧みに籠絡して秘密を殘らず白狀させる迄に至る手際は實に甘いものですが、其甘ければ甘い丈、ヘッダに對して反感が起り、テーアに對して同情が起つて來ます。そして何だか淺ましいやうな氣がしてヘッダのやうな女には夢にもなりたくないものだと熟々感じさせられました。

思ひも懸けぬテーアとレエボルグとの關係を聞いたヘッダの心は隨分亂れたやうですれ。自分よりも下級生で有つて溥のろな、あの髮の毛を引張つてはよく愚弄つて遣つたあの小供ぢやないか、何生意氣なといきなり立つた事でせう。自分が曾て關係した男そして愛するが爲に捨もした男の上に、ヘッダには取るにも足らぬ女のやうに思はれて居たテーアが意外にも偉大な感化力を有つて居たと云ふことは余程癪だつたに違ひ有りません。ヘッダもケチな女ですれ。嫉妬でせう矢張り。併したゞ單純な嫉妬ではない、目今の自分の不愉快極まる絕望の生活にむしやくしやして居る處へもつて來て、テーアのやうな女が自分以上の力を持つて居て、人一人の生涯を支配したと云ふのが無暗と口惜しかつたと見えます。

飮まないと云ふ酒を强いて飮ませたり、遂とブラックの家の晩餐會に迄もレエボルグを突出してテーアが折角の苦心を水泡にした揚句、「そら、さういふ風になると、レエボルグも以前の往來に戻るのです――もう〳〵何處かの厭らしい女の愚痴から離れて――仕舞つて全然獨立の人になるのですよ。」なんてあてつけがましい嫌味な文句を並べて居ます。

それにしてもテーアとレエボルグとの關係はどう見ても理想的です。殊にレエボルグのやうな墮落した、性根なしの、不眞面な男を對手取つてあの美しい關係を持續し不身持を改めさせたばかりでなく、あれ丈の事業を助けたり、勵ましたりして成就させたテーアの忍耐と、人知れぬ苦心とは察するに餘りありてす。溫順な善良な單純な犧牲的な女の人格力でなければ到底も是丈の事は出來ますまい。私は何となくテーアに對して床しい感じがします。そしてレエボルグがあんなデカダン肌の男だと思ふにつけテーアの苦心が察しられます。そして表面に顯はれない偉大なる眞の婦人の力と云ふものに敬服します、全くテーアの樣な婦人の前に私は頭が下げて見たいのです。

何だか道學者先生見たいな、又時代晩れのしたやうな考だと新しい女の方々などからはさぞ笑はれる事でせうが、私は眞箇にテーアのやうな女が好きなのです。

勿論中世の理想的婦人でせう、けれども如何に時代が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

奈何しようが斯うしようが、矢張單に男子に及ぼすばかりでなく、一般社會に、人類に、世界に及ぼす眞箇の婦人の力は最後の勝利ですわ。眞面目、單純、忠實、純潔、熱心、犠牲の精神、没批判的態度が爭はれないものでかうした暗々裡の勝利を得せしめるやうです。近頃頻りと此様な事が考へられるものですから、ついうつかりテーアをもち上げて了つたのです。女の强味は單純にありやしないでせうかしら。女の尊さも。總て美しさも。

此頃の私の心狀態は無暗と此様な事が親はしくつて仕方がないのです。

ヘッダとテーアとの人格は到底も比較物になりませんテーアの前に跪く私は、ヘッダの面に唾する私です。

然し、あのヘッダの深く抑へては居るが始終苛々として、どうかしなければ居ても立つても居られないと云ふ絶望の氣持には私共は染々同情も出來ますわ。なまじ此同情が有るのであの蕃惡、無法な原稿燒の暴習行爲だつてさう／＼咎める氣にはなれません。

久しい間の無事、平穏、單調に倦み疲れて有り余る力を内に持ちながら集中點を見出せないで、只苛々と荒んで行く中、偶々此様な事件に出合して、統一のない破壊力を集め、畏る可き死力を盡して一直線に現はれて來たのではありますいか。だから善惡を念頭に置くでもないし、行爲の結果を思ひ遣つて恐れる暇もなく、利害關係の打算なしに、殆んど夢中でやつてのけて仕舞つたのですわ。忽ち身の破滅となるやうな行爲を如何にも平氣無雑作に、何の躊躇もなく濟したものでやりのけて居ますあすこが面白いぢや有りませんか、偉大な感じがしますよ。偉大と云つては少し可笑しうございますが。

只復讐の刹那的快感、絶望の人のみがよく知つて居る犯罪の快感、それ丈しかなかつたのでせう。あの原稿を燒いて居る瞬間は殊によつたらそれすらなかつたかも知れませんわ。只忘我と恍惚と。

又考へて見ますにヘッダは嫌な々々々生活を早くお仕舞にして了ひたい一徹から、太く短く、半ばやけから華々しいくゝりを付けたくつて一つには彼様な破壊的な行爲を態としたのでせう、嫉妬とか復讐とかの形は取つて居ますけれどそれがヘッダの本來ではないらしいやうです。空虚な生活に堪へられなくなつてあんな事をして故意に身の破滅を招いたのだと見ると同情の涙も湧きます。

テスマンの人物

（H）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

テスマンはヘッダの夫としては餘りに凡庸過ぎた。下手な月並俳句を詠むやうな感じがする人です。程度以上の好人物で寧ろ無感覺に近い無神經性のやうにも見えます。彼が人間たるの本性は文明史の講師たらんとする時に於て、ヘッダがレエボルグの原稿を燒いたのは貴方に對する愛の證據だと云つた時、父親たらんとする喜悅にのみ打消されて居た彼は、總して仕打がお目出度過ぎて居ます。彼は只に書物の奴隷たるに滿足して、かつは意に適つた妻を迎へ得た喜悅に余の事を顧る暇なく、譯もなくワク／＼してヘッダの新要求も、內的生活をも自己に對するヘッダの心持をすら看破する丈の慧眼を有たなかつたのです。彼の心は餘りに古典的で少しも働かない。彼は吃度往來を歩く時、自分を忘れて四邊の事象のみを見廻してキョロ／＼通り過ぎる人だらうと思はれますね。家長たるの品位も威嚴もなく、推察するに彼の望んだ理想的の家庭と云ふのは聊かも家庭らしい感じがしないばかりでなく獨身者の男女が寄集つて勝手な眞似をして居るやうにしか思はれません。ヘッダの孤立的な態度が重な原因をなしてるのでせうが、テスマン其人にもそれを統御する丈の技倆のない處が如何にも傍から見ると齒痒く感じられます。然しヘッダは斯樣な中に在つても尙其貴族的な品位を落すまいとして、飽く迄冷靜に、自若として利己的な持ちつゞけます。故意に佛性の伯母をいぢめるのも、どこ迄もテスマン家などゝ同化しまい、ガブラア將軍の愛孃たる尊い氣性を損じまいとの淺い誇りの爲せた業と解釋するより外御座いますまい。

（Y）

私は最初此脚本を讀んだ時、女主人公ヘッダが夫テスマンの其所謂意味の家庭的な平凡、俗惡に對する嫌惡と侮蔑の餘り、忌々しさに堪へ兼れ、自分の最忌はしいと思つて居る懷妊と云ふ事を以てして、故意に自分を恥かしめて迄も夫を輕蔑して一種の快感を買ふに過ぎないのみで、必竟貴方を愛する爲に原稿を燒いたと云つたと同樣の大嘘と心得て居ましたが再讀するに當つて其事實なのを初めて確めました。

と同時に私は自然の皮肉に逢着したやうな感じがして冷笑を禁じ得なかつたのです。伯母さんはテスマンにヘッダが後でお前にこつそり話す事が有るかも知れないよと注意を與へ、伯母さんが歸つて了つて二人切りになつてからこんな會話が交はされます。

「それから——丁度いゝ機會ですから、お話しますがね——否、否——伯母さんにお聽きなさい——會得りますから。貴君が得心が出來るやうに話すでせうから。」

テスマン「ああ！　大概お前の云ふ事は見當が附いた―え、眞實―え？」

ヘッダ「そんな大聲をなさるなと云ふに！　勝手に聞えると云ふのに。」

テスマン「はゝゝ。勝手にって！　はゝゝ、一寸、何てまあお前は可愛んだらう！―勝手には、はい、下婢（ベルサ）一人限りて座いますよ！　僕は行って下婢に話して來る。」

ヘッダは夫の斯の如き様を見るに堪へませんでしたらう。嘔吐を催す許り嫌らしくも、卑しくも馬鹿々々しくも思ったでせう。然し取りも直さず此心の底からさげすんでる夫の前に明らかな敗北を見たのでした。彼女は常に死程惡んで居たにも係らず遂々懐妊して了たては有りませんか。そしてそれが夫を斯う迄喜ばせたては有りませんか。夫を嘲笑するのはやがて自分を嘲笑して居るのでした。彼女のプライドは地に墜ちて仕舞ひました。どんなにか夫をはた自分を呪ひましたでせう。

ヘッダ「あゝ、私は死んで仕舞ふから、私は死んで仕舞ふから　」

テスマン「え、何うしたって――え？‥

ヘッダ「貴君！　馬鹿々々しいぢや有りませんか、」

私は今此後のヘッダの行動を評するに當って、其背後に彼女は懐妊して居ると一寧を忘れずに置く必要があるやうに思はれます。何故なら之は彼女に取って殆んど想像以上の打擊、否到命傷であったに相違ありませんから。夫テスマンが如何な好人物であったか手にとるやうてはありませんか。

（H）

ヘッダの死

是より先きまだ原稿を燒かない前の事、ヘッダは再び自分を救ふ事の出來ないのを知って、ひそかに自殺を覺悟したのでした。レエボルグに紀念として、昔一度それて彼を狙った事のある。彼がプラア將軍の短銃を渡して、是を以て美事な最後を遂げて呉れと再三賴みます。ヘッダは自分の戀人の美しい最期に總ての希望を托したのでした。戀人の上に自分の意志の顯現を見て快惑に打たれやうとしたのです。さうして滿足を得やうと試みたのです。此世の中の總ての事に望みを失った人、又人間と云ふ生物に憎惡の念の强い一種の潔癖家はともすれば生涯に唯一度しかない死に多くの夢を篭れて、責めてもの心遣りとして、甲斐なき希望を繫いて居るものです。只單純な、眞面目な、嚴肅な崇高な宗敎的情操に恍惚として、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

生物の本能である死に對する恐怖の暗い影などは限なく漲る白光に跡方もなく消されて仕舞ふものであります。
　彼女は戀人の死に余り多くを期待して居ました。ヘッダは判事ブラクから彼の死を聞いて「やつとの事で立派なことを！」と獨語ました。
「あゝ、判事樣、ま、何たる僥倖でせう、學士の歿つたのは！」とも云ひました。
ブラック「僥倖？—え、奥樣？、左樣、實際彼に取つてはね。」
ヘッダ「否、私に取つてはてす—自分の勝手にああ云つた所業を、此人生でする事の出來ると云ふことを知るのはね。ね、何だか思ひ寄らぬ神々しい光輝が映ずるぢや有りませんか。」
又斯うも云つた。
「…私は唯彼人が自分の思つた通りの生活をする男氣を持つて居たと云ふ事丈を存じて居るのです。さうして—此まあ立派な最期を！、其最期に美しいと云ふ感じが映ずるのです！　ね、立派な力と意志とでもつて、此人生の快樂を見捨てゝ仕舞ふなんて—まだあの若さで。」
此處に至つてヘッダは彼が曾て自分と關係の有つた男だと云ふ事も、生涯の中人一人の運命を支配して見たいと云ふ自分が最初の欲求も忘れて一種の恍惚狀態に落入つて仕舞つて居ます。彼女は時に隨分判斷を失するけれども兎に角自分で作り上げた或觀念の中に忽ち自己を沒入し、觀念に生きる力を有つて居ますれ。案外單純な精神的貴族であるから、何處か氣高い一節を併へた處が仄見えます。是が彼女に對し又彼女の惡行に對する憎惡の感を余程和らげさせて呉れる理由の一つでございませう。然し彼女の喜悅は空しく外れて、事實レエボルグの最期は醜惡を極めたものでした。
　彼女は最後の希望とプライドとを全く失つて、
「…忌々しいつたらない、私の手を出す事は、何から何迄皆斯う喰ひ違ひになるのだらう—…」と絶叫しました。
事の意外は意外を通れて燒き捨てたレエボルグの原稿はそれなりに滅せず、テーアのポッケットの中から彼が口述した折用ひた控えが顯はれ、テーアとテスマンは今宵後の一室で協力してそれの整理に掛つて居ます。
　其上彼女が彼に與へた短銃が祟つて、彼女は愈々窮地に落入りました。扨斯う物事が悉皆食ひ違つて來て見ると、ヘッダは元々氣の少さい臆病者で有りました。實は自分が薛褔者でありながら此事件の係合となる事を甚く恐れ、かの怪しい唱歌者のダイアナ等と一緒に裁判所に召

喚されることには到底堪へませんでした、彼女は判決を受けると云ふやうなに甚く恐れ戦慄いたものでした。

「ですけれど、其様な醜悪い事、私に關係した事ぢやないわ。」と云つて逃げを打ちます。彼女は自由、獨立を欲して居ながら其行爲は何時も卑怯で、逃腰の處が多かつたやうでは有りませんか。一寸した社會的の事件であつて所謂自己の面目に關する事は非常に恐れました。

世間通の悪狡猾い判事はヘッダの弱點等は疾に呑込んで居ます。「併し、別に心配なする事は無いんです――自分が沈默を守る限りは。」と云ひます。短銃の持主を知るの唯一人です。此時ヘッダは自分は他人の掌中の者である事に感附きました。判事は何處迄も執念くヘッダの弱味に食ひ込んで居るのです。ヘッダはもう堪りません。

「それでも矢張、貴君の好自由の體れ！　貴君の好自好にされるのね！　嗚呼、畜生！　否、考へる丈けでさへ私はそんな事は我慢が出來ません！死んだつて」

最早何時もの冷靜も有りません。頭腦は全く混亂して何等の辨別も有りません。彼女は曾てブラックに云つた通り知らず知らず一日一日と否、一刻一刻と自分を破壞して來たのでした。ヘッダは身も心も疲れ果て、今更救ひ出す道も、只途方に暮れる許りでした。

憎らしい、忌々しいブラックを避けて彼女は背後の室に行きます。そして騒々しい舞踏曲を無茶苦茶に一頻り奏し終ると――彼女はやがて死にました。全く理想通り只一發の短銃（ピストル）で額を撃ちぬいて美しい死を遂げました。輕侮し、嘲笑し、憎悪し置かなかつた連中の心に夢にだも思ひよらなかつた不意の驚愕を見舞はせて….。其蒼白い冷たい額には苦悶と寂寥と孤獨と、絶望と敗北を嘲ふ物凄い微笑が漂つて居ましたらう。

懐妊した若い女の屍、しかもそれを知つて居る唯一人は矢張り彼女が生前侮辱して止まなかつたテスマン其人ではありますまいか。併し彼等は其屍によつてなほテスマンを嘲り其氣高く。美しい顔によつて、産褥の醜悪と疼痛に眉を顰め、口を曲める事なくして死んだことを責めてもの快さと喜んで居ると云ふかも知れません。

浮いた干燥（はしや）いだ、騒々しい、矢鱈に奏いた舞踏曲――ピストルの響――

是が妙にヘッダの性格を顯はして居るかのやうに私には思はれてなりません。そして彼女は死ぬ迄否斷末魔の瞬間でさへ自分の意識に向つて注意を集中することに努めなかつたらしう御座いますれ。奈何な稀薄な主觀に生きてる凡人でも死の瞬間丈は醇化せられて眞生命を内心に感ずるものですのに、彼女は遂に靜に之を味ひ知る事なくして、彼女の所謂生涯を通じて只一度の死を經過し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て仕舞つたかと思ふと染々不幸な女だつたと氣の毒てなりません。

全體に亘つての感想

（H）

私は「イプセン」物を澤山讀みませんから、イプセンの女性に對しての內容をよく知りません。只「ヘッダ、ガブラア」が名高いと云ふ處から一讀して見ますと、二度と再び手に振れるも嫌と云ふ程此ヘッダに對する惡感を催しました。其底意地の惡い冷淡な獰惡なる態度が、虛榮と嫉妬の權化の樣にも思はれました。

是でもイプセンの理想の女て、然かも覺醒した女かと驚きもし呆れもしました。私の眼には如何しても醒めた女とは受け取れません、那邊に自覺あり、覺醒があるのてせう。只自意識の強いと云ふ處を意味して強いて誇張したらさう云つて云へないこともないか知りませんが、それとても其自意識なるものが頗る薄ペラで、普通の女に有勝な片意地とか、勝氣な女の負け嫌ひとても云ふ樣な極詰らぬものであるとしか思へず、女の立脚點から見て何等の同情もない、評するに足らぬ女の樣に感じられてなりませんてした。

併し今度、男氣を振つて仔細に再讀して見ますと、左程厭てもなく全部通じて殊の外面白く讀まれました。そして今更ながらイプセンの非凡な技倆に感心もし、其巧みな配置を嘆賞したのてした。

曾て逍遙さんが鑑賞者自身の性質次第て同じ大家の名作ても好惡の別を生ずると云はれましたが、同一の作物に對する感じてすら鑑賞者の心持に依つては斯うも違ふものかと思つて私は大に悟る處が御座いました。

即最初の折は作物に對する批判的餘裕を缺いて居た事と意外なるヘッダの態度に驚かされて憎惡の念ににのみ滿されたと云ふことにあつたらしく思はれます。

私は敢て全然とは申ませんがヘッダによく似た女性にどうかすると出逢ふことがあります。

「ヘエ、左樣てせうとも、れ私只一度て宜いから生涯の中に人間一定の運命を自分の自由に——思ふ通りにして見たいわ——」

是が心持がヘッダの行爲の總てゞあつたらしく見えますれ。そして其自意識の強い點、一歩も人より下る事を好まない、美貌に於て、才氣に於て、門閥に於て、其華々しい虛飾的生活に於て。只浮々と派手に面白可笑しく外面に於てのみ生活して來たヘッダが、眞の人生の意義と云ふものに觸接なし得ず、徒らに悶々憂苦の中に自惱

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を招いて行く徑路が如何にもよく活躍して居ます。

「眞個に貴女は馬鹿れ——それから、ホラ十時になると貴女の大事な親友が葡萄の葉を頭に乘せて千鳥足で來るぢや有りませんか。」

ヘッダの言葉として如何にも其性格をよく語つて居る面白い詞ではありませんか、けれど嘲笑つて強がるヘッダより苛なまれて慄へて居るテーアの眞面目から出て居る力の方が強いことは爭はれませんね。外面ばかり無暗と傲慢て、内省とか精神的生活とか云ふ事は殆んど皆無と云つても差支えない、此樣な女が自覺した女だと男性の眼に映ずるかと思ふと實に情ないものだと熟々嫌になつて仕舞ひます。怜悧な女には違ひ有りません、其策略的秘術的な手腕が手に足に眼に口に聊か内省顧慮を要せずずんずん運んで行く處は實に目覺ましいものですが是のみをもつて目覺めた女と首肯する事は出來ません。ああ覺醒た女とは果してどういふのを指すてせうか。

（Y）

眯つて彼女の全生涯を通じて考へて見ますに矢張彼女は自己の内生活に於ては案外意識的の處が少なかつたやうに思はれます。

彼女の云ふ事、爲す事、又物事の考へ方、そこに一種のインディビデュアルな處は有るにせよ、何一つとして女性的でない處のものは有りませんでした。時には女性のあらゆる弱點の結晶體のやうに思はれて、私は幾度か催す嘔氣を抑へるの餘儀なさに出逢ひました。

彼女は決して他を容れる事が出來ませんでした。又自分をも容れませんでした。何物にも同化されませんでしたが、又何物をも同化する事が出來なかつたのです。先天的に同情と同感の能力を鈌き、自ら門戸を閉し偏狹な利己主義者となり、孤獨と、寂寥と、空虚と自滅が生じました。しかも其苦痛に出逢つて堪へられなくなると、何時も自分を措いて無駄に他にのみ向つて求めました。あらゆるものを否定しながら矢張其否定したものに依賴して居たのでした。いつもヘッダの中心は自己以外にあつたやうです。

彼女が自分として守つて居たあの少さなセルフイシュな我、其我を擴大すれば、其擴大の至極は無我である事を知らなかつたのです。生涯の中に一個半個の人間の運命を自由にして見たいと云ふやうな枝葉の事を考へて居て、先づ自ら自身を自由にし、自ら自らの主たり得る人とならうと云ふやうな第一の問題を嘗て一度も考へたことがなかつたらしうございます。矢鱈に自由々々と叫びながら遂に眞の自由に至らず、どう考へてもヘッダには眞劍

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な處が缺けて居ますね。あれがあの悲劇をなした不幸な性格であつたのでせう。

メレジコウスキーのヘッダ論は成程隨分ヘッダに呑まれて居るやうですね。併しあの中で、

「女は其信仰と信仰の要求に於て確に男よりも執拗なるものである、若し斯ういふ性格であつて其内的勢力が動作に導かれなかつたならば、其時それが犯罪に導かれるのは止むを得ない」と云つて居る言葉は私などの心にはヒシ／＼と響いて參ります。

ヘッダは確に信仰がなければ生きられなくなつて居たのです。併し自分自身それを明に意識して信仰を得んが爲に努力したかどうだかは頗る疑はしいものです。それ程生命に對する執着心が強くなかつたらしいぢや有りませんか。どうも物足らない感じがします、中途でごまかしちまつたやうで。

男子もさうでせうが婦人は殊に信仰がなくては生きられますまい。自分を眞面目に考へられば考へる程宗教的の要求が湧いて來るものです。ゼームスは人間の氣質を二つに分けて軟心派、硬心派と云つて居ませう。これを男女に當嵌めて見ると女はどう見ても軟心派ですね。

若しか、無宗教、無信仰で居て、醇化した、高調な生活を送つて行かれると云ふ女がありますなら、其人は餘程自分を知らない人なのでせう。私に云はせると吃度不眞面目と云ふより外ないと思はれてなりません。

矢張どう考へて見ても婦人一般の上に懸つて居る使命は宗教的に外ならない樣に、此頃の私は切にさう感じられるので御座います。

話が大變橫道へ外れましたがつい機づみに乘つたので御許し下さい。

それからヘッダガブラアの劇は全く悲劇に相違ありますまいか？　何だか讀み終つた時の感じは喜劇じみたものゝやうに感じたのです。何故でさうか。私には分りません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

◎本誌青鞜も愈々こゝに二號を重ねます。どうかと思つて心配して居りましたが、皆樣の非常なる御熱心のもとに初號は殊の外なる好景況を呈しまして中には市内の書店にはもうないからと折角本社あてに御申込下すつたにも係はらず品切れて御送り致す事が出來なかつたと云ふお氣の毒樣をする迄で御座いました。私共一同深く皆樣方の厚い御同情と御熱心とに感謝いたします。これからも愈々皆樣方の固き御決心を無にせぬ樣出來得る限りを盡して此雜誌の完全なる發達を遂げんことを一向希望して止まないので御座います。

◎社員の方々は九月より毎月十五日迄に會費三十氼青鞜社宛に御送り下さい。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎を堅固にするの必要が御座いますから、多少に拘はらず基本金の中に有志諸姉の御寄附をお願ひ致したいと存じます。

◎社員の方々の原稿は隨時青鞜社宛に御送附下さい

◎茅野雅子氏の短歌は愈々次號に揭載致す事となりました。

◎又此度社員野上八重子氏にはよんどころない御事情の下に一時御退社なさる事となりました。眞箇に私共殘重にも殘念には存じますが何分餘儀ない御事情故。尙御作は時々頂けるさうで御座います。

◎前號に豫告致しましたものゝ内で野上八重子氏の「[illegible]の讃美」及中野木内の作らいてうの「高原の秋」は都合により今回の誌上に缺きます。

◎本社の賛助員岡木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて先日より一六の日に松月古流生花、投入花及千家流茶道を松月古流家元藤城庵打瀨翁補助の下に指南せらるゝとの由。

◎一生懸命には試みましたものゝとかく此道には新米の事とて前號などには餘程活字に誤謬が御座いましたさうで皆樣へ對しまして誠に御申譯も御座いません。其他體裁等も追々馴れて參りませうと存じますから何卒お目寬やかに。

寄贈書目

層雲(一ノ五)	層雲社
婦人の鏡(八月號)	東京婦人社
蝸牛(九月號)	蝸牛社
月光と臥床(一集)	白藻社
窈窕(一ノ四)	窈窕社
パリ(第一)	
赤い花(七、八月號)	秋田、野の花社
心の花(十五ノ九)	竹柏會出版部
ホトヽギス(九月號)	ほととぎす發行所
車前草(一ノ一)	車前草社
春夏秋冬(九月號)	椒山書店
文學界(一ノ六)	文學協會
旅行(一ノ一)	東京旅行社
俳味(二ノ九)	俳味社
路上(歌集) 若山牧水著	博信堂書房發行
評は次號にて熟讀の上。	
矢車(九月號)	矢車發行所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三號豫告

題未定(戲曲)	長谷川時雨
安心(小說)	水野仙子
枯草(短歌)	茅野雅子
題未定(詩)	與謝野晶子
高原の秋(叙景文)	らいてう
題未定(小說)	阿久根俊子
祭の日(小品)	杉本正生
題未定(散文詩飜譯)	ポオ
俳句	白雨
評論	
題未完(小說)	上田君子
其他未定のもの	

＊　＊　＊　＊　＊

青鞜社概則

第一條　本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す。

第三條　本社事務所を本鄉區駒込林町九番地物集方に置く。

第四條　本社は社員賛助員客員よりなる。

第五條　本社の目的に賛同したる女流文學者將來女流文學者たらんとする者及び文學愛好の女子は人種を問はず社員とす、本社の目的に賛同したる男子にして社員の尊敬するに足ると認めたる人に限り客員とす

第六條　本社の目的を遂する爲め左の事業をなす

一、每月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。青鞜は社員及び賛助員の創作、評論、其他客員の批評等も掲載することあるべし

二、每月一回社員の修養及び研究會を開くこと但し賛助員の出席隨意たるべし

三、每年一回大會を開くこと大會には賛助員客員を招待し講話を請ふことあるべし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四、時に旅行を催すこと。

第七條　社員は社費凡三拾錢を毎月納附すべし。社費は毎月會並に大會の費用と社員、賛助員、客員への雜誌寄贈費とに當るものとす。

第八條　雜誌「青鞜」發刊の經費は發起人の支出により、其維持は社員、賛助員、客員其他の寄附による。

第九條　幹部は編輯係、庶務係、會計係よりなる。

第十條　係員は四人とし、半數づゝ一年毎に交代す。最初は發起人等是に當る。

第十一條　係員は社員の選擧によるものとす。

第十二條　係員は再選することを得。

名　簿（いろは順）

賛助員

長谷川時雨　　岡田八千代
加藤籌子　　與謝野晶子
國木田治子　　小金井喜美子
森しげ子

社員

岩野清子　　戸澤はつ子
茅野雅子　　尾島菊子
大村かよ子　　大竹雅子、
加藤みどり　　神崎恒子
田原粘子　　田村俊子
上田君子　　阿久根俊子
山本龍子　　佐久間時子
荒木郁子　　杉本正生
水野仙子　　井上民子
瀧野ともえ　　中野初子
平塚明子　　保持研子
木内錠子　　物集和子

豫告

青鞜社同人譯

ポオ散文詩集

青鞜社出版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東京市本郷區駒込東片町七十六番地

株式會社 東盛銀行

【電話下谷一千百四十番】

頭取 牧田義雄

本郷區根津八重垣町三十二番地

根津支店

【電話下谷千百十五番】

北豊島郡板橋町七百六十一番地

板橋支店

【電話番町百九十三番】

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

第七年十二號 ・日發行

十月號

定價一冊金拾五錢送料壹錢五厘

●私の貞操觀……與謝野晶子

●女子の腦髓……澤田順次郎

●九月七日・横瀬夜雨　●詩……森川炎村　●歌……原田琴子

●小品文……河井醉茗　澤村胡夷

●竹久夢二論……岡田三郎助　中澤弘光　外數名

●日光隨行記・神近市子　●富士より箱根へ……平塚白百合

●婦人記者の地位・澤田撫松　●秋の夜語・坂東太郎

●口語新譯 枕の草子……外島浪之助

●數字の上に表はれたる婦人の自活……しぐれ月

●東西 夜の歡樂　大阪の帝國座、東京の帝國劇場……

▲繪と歌と……竹久夢二

十月十日　女子文壇　第三増刊

娘時代

二百頁美装　價廿錢　送料壹錢半

東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版　(振替口座東京第壹七弐九番)

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊同二圓八十錢

第百三十六號　十月一日發行

戯曲 街の子 …… 鷗外
新無線電話（歌舞伎座買收の件 …… 室田武里
「扇屋」と「陣屋」 …… 伊原青々園
拙作「夢殿」 …… 石田寅彦
「夢殿」の衣裳道具 …… 鳥居清忠
喜劇「心機一轉」の作意 …… 太郎冠者
帝國劇場の新脚本 …… 尾上梅幸
「血統」の脚本 …… 中村春雨
新富座藝談（河合、村田、伊井 ……

私演の舞踊劇 …… 坪内逍遙

俠艶錄」の評 …… 林和生
喜多村と河合との力技 …… 葉椰子
今泉壯太郎日記（二） …… 青々園
三座の影繪 …… 幸堂得知
帝國劇場の胡蝶の舞 …… 松居松葉
帝國劇場の「世繼曾我」 …… 岡本綺堂
日本最初の外人劇 …… 山野芋作
九月の新脚本 …… 川村花夢
故市川團藏の事 …… 青々園

附錄脚本 刑罰 …… 情見陸郎

本郷區湯島切通
坂町附盤報付內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一一〇六

十月一日發行

價廿五錢
郵稅貳錢

スバル

十月號

雁（小說）　森鷗外
政チヤンの死と其前後（小說）　生田蝶介
影ノ法介（小說）　山本禿坪
雪の上（小說）　中島清
嵐（脚本）　水上瀧太郎

水莊後記　吉井勇
椋鳥通信　無名氏

詩
佐藤春夫
阿部省三
山本禿坪
水野芳舟
高村光太郎

歌
三ケ島葭子
原田琴子
長島豊太郎
スバル同人

東京市神田區北神保町二
昴發行所
電話本局四二六四

心の花

第十五卷 十月號 第十號

塙保己一の事業　芳賀矢一
塙保己一の逸話　井上頼圀
塙保己一と歌學　佐佐木信綱
群書類從の序跋　和田英松
今　武林無想庵
伊東　大村八代子
岳麓湖上吟　川田順
倫敦より　大河内國子
幻の華　白蓮
秋の一夜　石榑千亦

定價一冊三十錢●半年前金七十五錢・一年前金一圓四十錢●稅共

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部
振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

近刊書目

小山内薫著　舞臺と役者
著者の演劇論集也
定價其他未定

北原白秋著　詩集　邪宗門　再版
改訂再版發賣
定價金八十五錢
送費金八錢

吉井勇著　水莊記
淒艶なる物語四編
定價金九十錢
送費金八錢

土岐哀果著　歌集　往復の路
著者の第一歌集
定價金五十錢
送費金六錢

發行元
東京市京橋區南傳馬町三丁目
振替貯金東京五六一四番
東雲堂

十月一日發行

創作短歌號

本號特價金參拾五錢
送費金貳錢

瓦斯竈十德

七輪は無損料竈は一ヶ月僅に金拾五錢
一日使用を後るれば一日の損あり、至急乞御申込

一、据付くるに廣き場所を取らず。
二、据付くるに多くの費用を要せず。
三、貯へ置くべき納屋の必用なし
四、晝夜何時にても使用し得らる
五、火災危險等の心配少しもなし。
六、煮焼湯沸に多くの時間を要せず。
七、點消は容易にて手數かゝらず
八、天井を燻さず髮や衣服を汚さず。
九、費用は炭薪に比ぶるも安廉なり。
十、煮物の出來よく調味頗る佳し。

神田錦町 東京瓦斯株式會社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ホトトギス

十五卷第一號 本號に限り十月十日發行

要目

●死人を罵る男と死人との問答
●秋の濱邊の犬　高濱虚子
●舞鶴心中の事實
●合歡の木　伊藤左千夫
●合財嚢（文學者歴訪記）　飛行機
●伊太利文學小消息　日野月明紀
●畫家と其周圍　齋藤與里
●感想錄　若き女醫
●繪畫三十葉

發行所　東京芝區南佐久間町一ノ一ほととぎす發行所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

最良髪油

みやけ油

登録商標

家庭重寶

專賣特許一一九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇振替口座八七五一番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

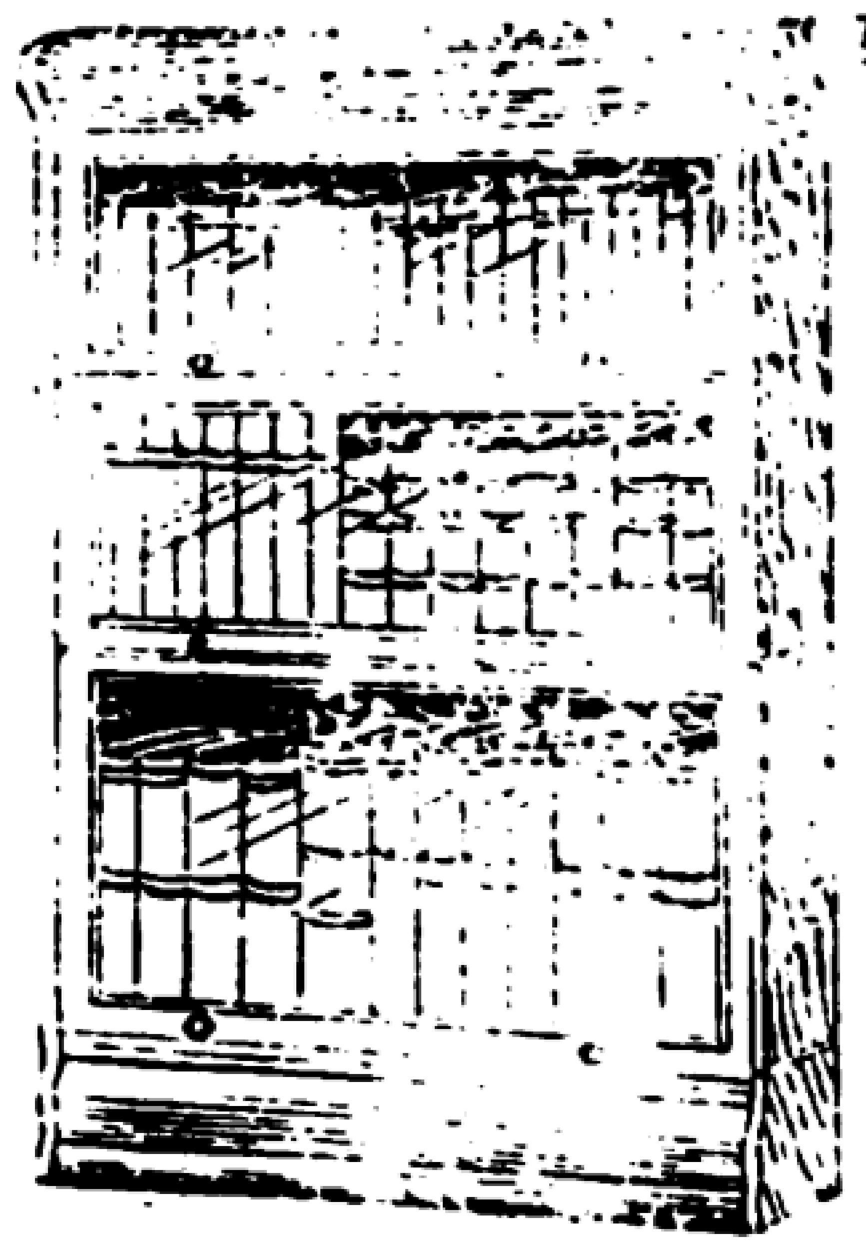
SECTIONAL-BOOK CASE

It fits anyplace

組合せ本箱

●最新式最新形の木箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

●多數の優れたる特徴を有す、其重なるもの左の如し



▲藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

▲室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得べし

▲硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに便なり

▲形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

▲之れを要するに最善最良の本箱!!

It grows with your library

構造を示せる目録は郵券二錢封入御申越次第進呈

定價
金二十六圓 桝製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製
運賃荷造費御自辨

●發賣元 東京市銀座大通新橋際 新橋堂書店
（振替東京二〇〇番 電話新橋一九九〇番）

村井弦齋著 増補註釋 食道樂 全一冊 (春の卷)(夏の卷)(秋の卷)(冬の卷)合本 定價金二圓 郵税金十八錢

村井弦齋著 増補註釋 食道樂 四季篇 (春の卷)(夏の卷)(秋の卷)(冬の卷) 四冊 各卷定價金八十錢 郵税十二錢

村井弦齋著 増訂 臺所重寶記 全一冊 定價金一圓 郵税金十二錢

赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 洋食五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵税金十二錢

赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 惣菜五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵税金十二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 年中惣菜 全一冊 定價金八十錢 郵税金十二錢

故久保田米僊選 毎日の惣菜案内 全一冊 定價金十錢 郵税金二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊畫 茶の湯の心得 附茶席料理 全一冊 定價金八十錢 郵税金六錢

赤堀吉松閲 奥村繁次郎著 名物 諸國料理 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

秋色漸く闌と相成候

十月一日より――例年の通り

冬衣大賣出し開催

本年は新柄格別多數到着に付一層盛大に相催し可申尚ほ此の機會に於て

お袷ろぬ御仕度の御便宜を圖り

一日より十四日まで破格を以て

特に
御召 金十一圓
本場秩父銘仙 金三圓八十錢
新糸織、紡績絣 金一圓四十錢
均一にて發賣仕候

よせきれ見切反物類は全部差換陳列いたし候

松坂屋

いとう呉服店

東京上野廣小路

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

増築落成

○十月一日より

○秋季新製品大陳列會開會

○藤原模様圖案應用衣裳陳列

○よせきれ見切反物數千種

○新商品（美術工藝品、陶磁器類 [illegible]食料品、雜貨類）陳列販賣

創業貳百五拾年

増築落成

紀念大賣出し

○餘興場と少女音樂隊設備

○寫眞室の新經營と假裝衣裳の用意

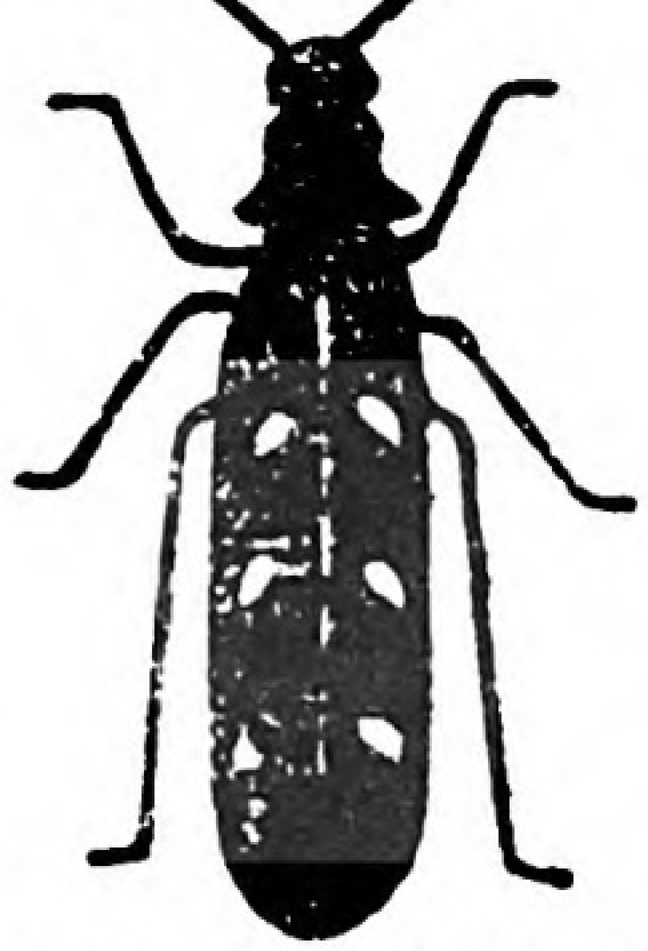
○藤原式休憩室新設と食堂の改良

○東京市第一の大窓飾と昇降機完成

東京日本橋

白木屋呉服店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



九月十五日より

友禪モスリン新柄陳列會

の開會を期とし モスリン類の大賣出し仕候

十月一日より

第廿二回新柄陳列會

雜貨新製品陳列會

諸大家新作美人畫展覧會

懸賞[illegible]模様圖案陳列

懸賞寫眞「少女」陳列

第二回美術及美術工藝品展覧會

寄切れ見切反物大賣出し

右何れも特別盛大に開會可仕候間、賑々しく御來觀被下度奉願上候

駿河町 三越呉服店

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

萬年筆ありや

机の上にてもよし原稿は之に如くなしレターも妙なり海に山に折々の野遊びにペン書きの端葉書は殊に風流也オペラバッグの中に萬年筆なきは現代のアトモスフィヤを呼吸する姫とは云はれじ

オリオン
オノト

金貳圓八拾錢
郵稅金貳拾錢

自金六圓
至金六十五圓

丸善株式會社

東京●大阪●京都

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

●毎月一回一日發行

●定價一册金貳拾九錢　郵税壹錢五厘

●原稿〆切期日は毎月十日限とす。

●前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓

●廣告料（一頁）拾五圓（半頁）八圓

●廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る、

●振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし

●郵券代用は一錢切手に限る（但し一割増のこと）

明治四十四年九月二十五日印刷
明治四十四年十月一日發行

東京本郷區駒込林町九番地
青鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
（電話下谷三七七六）
振替東京口座壹壹六〇番

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局（一一二四　一三二八）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第二號
明治四十四年十月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER